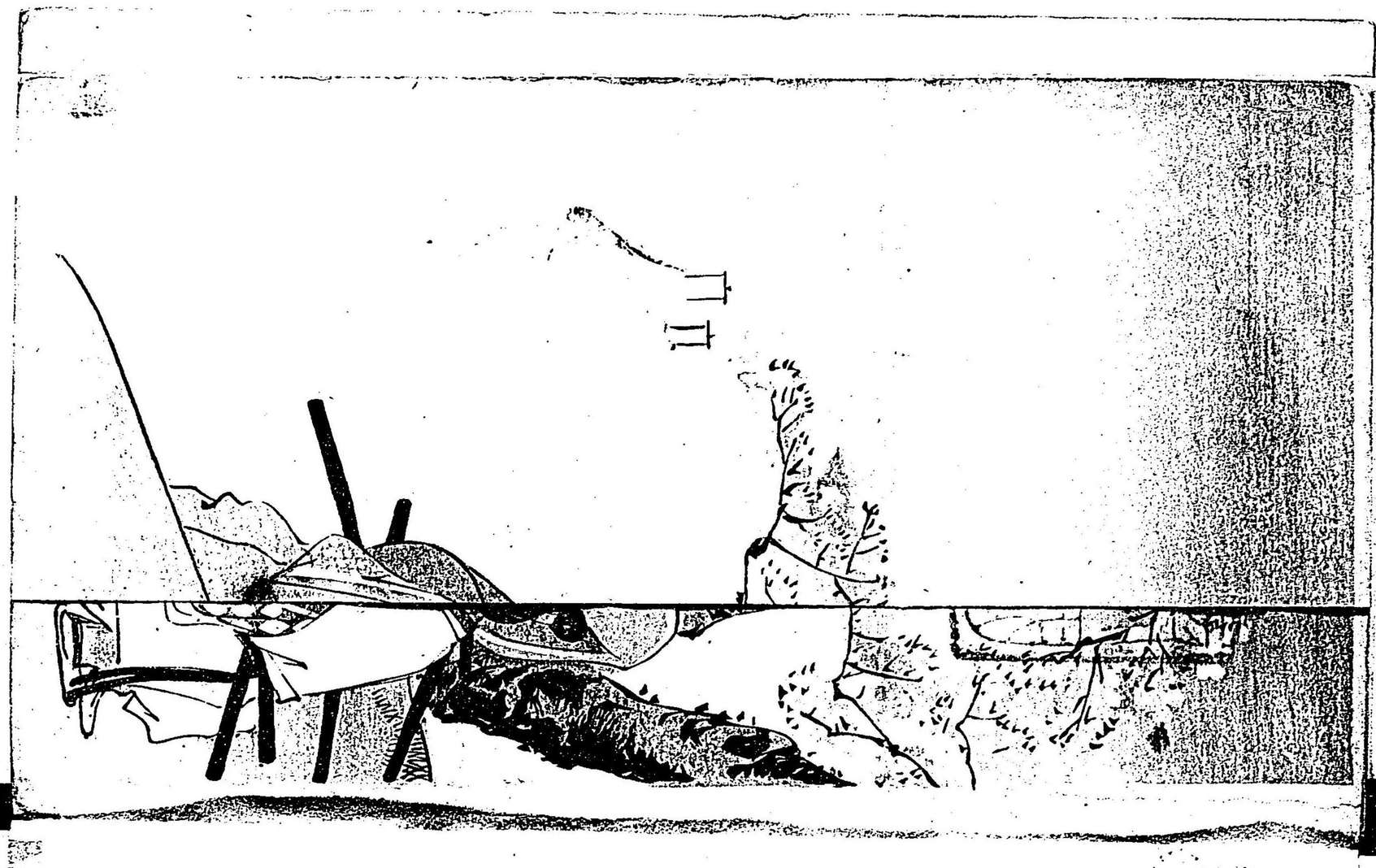
7749
特9
35

徳川十五代記 巻五

梅川燕林 著
今村次郎 述記

東京文華堂



特9
35

徳川十五代記 巻五

桃川燕林 講演
今村次郎 速記

第一席

二代記

元和三年福島左衛門太夫正則の家は断絶致し申し上げます

ましたが発たて二代新將軍と申し上げたる秀忠公の思召しに依りまして西丸の所、九とも前回に申し上げました通り家康公御遺言なされ日ヶ月ヶ丸の所、九とも前回に申し上げました通り家康公御遺言

るから夫を守うて福島家を倒しました夫までは

二代將軍は只温順にして決断力に乏しき御方だと云つて居た者もございました所が福島の家を倒しましたに就て實に御勇氣のある所を一同感心をして此盛衰では行末徳川の御代榮へさせ給うらんと大名旗本衆に於ても大きに喜こんで居りました

た所が御簾中およう様との間にお子様が出來まして、御總領を竹様と申し上げ、其次の御子様を國様と申します、一説には竹様は春日の局の御持ち申し上げた御子様だと申しますが春日の局と云ふ人はお守り役に當つてお乳を上げた者だと申します國様は御優しう在せられて竹様の方は大層御活潑でございまして、モウ六ツ七ツの頃はいにあると竹様のお悪戯は容易あらん事でございます二代の君は俗自分が誠に柔和で在つしやるから兎角物の荒々しいのを好みません、どうも竹は困つた者だと云つて御寵愛は國様の方へ傾むきまする、勿論竹様のお側には土井大炊守、酒井雅楽守、青山大蔵太夫と云ふ附人がある是をお守り役と申します、國様の方へ平岩主計頭、本多上野介、鳥井左京亮と云ふお附人がございます或時竹様がお庭にお立出で遊ばした時に、掃部頭が幸はい御城内に出仕致して居りましたも

のだから若様のお供を申し上げて大勢の御小姓共をお庭に出てました　竹「掃部の爺其方は老体であるけれども戦場を往來致したと云ふが左様か　掃「御意にございます戦場往來を仕まつりました　竹「戦争と云ふ物は面白い物か可笑物か悲しい物かどうぢや掃部頭是を聞て心中に感じましたが　掃「若様はどう思召します　竹「ウム予は戦争と云ふものは面白い物だと思つて居る　掃「夫はどう云ふ譯でございます　竹「然ば國を爭そひ互ひに腕を爭そう所であるから此位ひ面白い事はないと思ふ予い幼年にして存ぜんが碁將棋あやをしても盤上に向つて爭そひ一目を取る、とか向うの王を賣るとか申し、戦争をすると同じ事勝を以て宜しとする、ふんお面白い事はあいと予は存ずる」掃部頭胸中にアい此お方は恐れ入つたものだ日光様御一言に

も幼年とは申しながら徳川三代は竹千代と云ふ事を仰せられ

たがお言葉の内にも物の爭そひをなし、碁將碁をしても面白いと云ふ此位ぬの思召しなれば三代將軍にお成り遊ばす事は偖かお物と喜こび　播「宜う仰しやいましたお父上に申し上げましたら定めてお喜みびございませう戰爭は面白いと云ふ仰せが何よりと存じます、播部有難く承たまはりました　竹「ウム左様ぢ、戰爭は其方も面白いと思ふか　播「尤とも左様でございます　竹「戰爭があれば宜いな　播「何と仰しやいます　竹「戰爭があれば宜い　播「是はしたり、其様な事を御意遊ばすものではおざいません、天下泰平を祈り居る今日に當つて乱れる事をお待ち遊ばすと云ふは甚はだ宜しうおざいません何で戰爭なぞをお好みにありますか　竹「播部は何故左様に申す、戰爭のあるのを待つと云ふ次第ではないが物は三代にして漸々形を造ると云ふ事を需者の物語りに聞た、何事も三代經なければ本統に出で

来た物でない、父上御丹精になつた所がまた二代、今三代の天下と云ふ所が一番難かしい物の移り目と言ふ時である、予は幼年あがら其邊を存じて居る然ば徳川の家を長く保たんとするには戰爭をなさんとも云へん、天下治まると雖も徳川に仇なす余類の殘り居る事を承知致す、固より無事を祈るは國家の爲めではあるが一朝事ある時には是を容易く治めるあり、又國家の爲めあり、我れ成長を致しなば仁を以て民を治め勇を以て國を治めんと云ふ心である　播「恐れ入つてございます、一々仰せられる事は幼年の君の仰せられる事とは存じません察する所日光様の御言葉と存ずる」と申し居りまする内に飛石の間の所がらチョロ〳〵と出でましたのは扇程の小蛇であります、其蛇が出ると云ふと竹様はお驚ろきになつて　竹「ア、蛇が〳〵　蛇が出たと云つて眞青におあり遊ばした、勿論此長虫と云ふ物は虫が嫌

うと云ふ事でございます餘りに周章しき有様に播部頭苦笑ひあがら持て居たる扇子の要に其蛇を掛てとゝと向ふの藪の方へ投り込んで仕舞ひました　播「エ、申し上げます　竹「何ぢや　播「御幼君には只今の仰せに驚愕があれば宜い百万の敵を破つて見せる、泰平無事は祈るが併し一朝事のある時には勇を以て天下を治めるとまで仰せられました其言葉の乾かざる内あ何で少さな蛇を見て左様に顔の色を變てお驚ろき遊ばしましたが甚はだ恐れ入りまするが其お言葉は御柔弱から出る事でございませう甚はだ君にも似合しからん事と存じます、斯様なる時には高聲に仰せられんでも小聲にて蛇が出たと仰せ遊ばしても宜しいかと存じます　竹「ウム播部何か予が蛇々と申したのが惡いか　播「惡いのではございませんが餘り形々し い仰せゆえ申し上げます、長虫で別段お騒ぎ遊ばす事はおざい

ませんと存じます　竹「アヽ左様か播部蛇と云ふ物は毒虫と云ふ事を其方は知らんか　播「固より毒虫と云ふ事は心得て居ります　竹「毒虫であるから予は恐れる播部其方は少さいから恐れんと申すか、オヤサ少さい物は怖くはないと申すか」と仰せられあがらせロリと播部を白眼だ時には、流石の播部頭ブル〳〵と震へあがら實に恐れ入つた物で、是即ち格言でございます ふさい物だからと云つて毒虫であるから恐れる、汝は予が幼年であるから侮ぜるかと云ふ事を口には出しませんが其言葉の中に意味が充分に籠つて居ります、播部頭心附き少し後に下りて只今申し上げました事は播部恐れ入りました偏へに御詫申す　竹「詫るまでには及ばん併し播部其方は小蛇であるから何共思はんであらうが万一彼の蛇に噛れ其毒の爲めに惱んだる節は何と致す、年甲斐もない、只今の如き事を申す事はならん

ぞ」と仰しやいましたが實に小供のお言葉ではあい、固より其時は竹様と播部頭と差向ひでいあい、御小姓其他お坊主等數多居りましたから其評判が忽ち高う相成りまして御幼君の竹様が庭先きに於て是れ〳〵と云ふ評判が一般よ立ちました、スルと大久保彦左衛門此由を承知して播部頭の屋敷へ其後四五日經まして罷り出でお目通りを願ひました通常から彦左衛門と云ふ人は誰に對しても遠慮のあい方ゆえ播部頭も餘り逢い度もございませんが併しあがら面會を致さんと云ふ譯にもなりませんから座敷へお通しにありました　播「何ぢやア彦左衛門彦「久々にてお目通りを仕まつり麗はしき尊顔を拜し歸身に取て滿足致します　播「イヤ其方も暫らく絶へたる樣子播部も餘程老衰致して……　彦「イヤ〳〵未だ御盛んでございます、今日彦左衛門罷り出でましたは餘の儀でもございません、四五日前

御殿に於て何か竹様の爲めに悉くとく御降參遊ばした樣子ゐ、喜とびを申し上げに罷り出でました　播「左樣云ふ貴樣は卑肉の奴だ降參をしたのに喜とびに來ると云ふ奴があるか　彦「併し其時の竹樣の御一言と云ふ物は御幼君の御言葉には存じません彦左衛門考がへまするには全たく日光樣が乘移つて居るに相違ございません　播「ウム予も實は驚ひいた怖くはないかと仰しやつて予の顏色を白眼なすつた　彦「イヤさうでございませう、申すも恐れ入りますが日光樣未だ御存生中に三代の天下は此者でなければ繼ぐ事は出來んと仰しやいましたが實に恐れ入たつ事で其儀に就て今日罷り出でましたが彦左衛門是より御城内に罷り出で竹樣御營め申さうと心得ます　播「夫はどうとも勝手にするが宜い　彦「御營め申すに就ても一寸御當家に罷り出で久々にて御酒を一杯頂戴して、行かうと心得まし

てな播「夫だけの事で參つて天下の一大事でゐ目通り致度と云つてどうも彦左衛門困る　彦「へエ困る事はおざいませんとお詫め申すにも工合が悪くて方へ參つて伺つて參りませんと精しくお話しを承たまはつて夫から罷り出て御幼君をお賞め申さうと存じて出ましたと申すゆゑ仕方がない播部頭も御酒を出して彦左衛門を對手に四方山の話しを致しソコヲ別れを告げて彦左衛門登城を致しました此彦左衛門と云ふ人は何時登城をしても差支ひのない人物でございます二代將軍お開き遊ばして一將「爺が參つたか是へ呼べと仰しやいましたが彦左衛門出あい我々の家と違つて御城内の事てありますからどうも廣いの何のと云つて上様の御在ての所へ急に行かれませんと彦左衛門は勝手を心得て居るから上様の方へ參りませんで竹様のお居間へ出ました、スルとアワツトと云つてハラ

駈で來るやうな音がするハヽア何か始めたなと思ひ彦左衛門様子を見るとエイホラ傍寄れ〳〵と云ふ聲をうも可笑あ何をして居るかと思ひましたが幾ら若君でも無暗に座敷へ通入るは無禮でありますから此方より彦左衛門大音を上げて彦「若様お在でおざいますか彦左衛門におざいます　竹「アヽ爺か　彦「若様居らつしやいますか　竹「居る〳〵　彦「何をして在らアしやいます　竹「只今行列の稽古を致して居る　彦「ハヽア明けましても宜しうございますか　竹「許す通入れ〳〵　彦「アヽ苦しいぞうも……　彦「何をして居らつしやいました　竹「行列の稽古余は馬だ　彦「馬にお乘りでございますか　竹「イヤ駈にあつたのだ　彦「馬になんなすつた……彦左衛門驚ろいて襟を開いて様子を見ると竹千代様が四ツん這にあつて居ると其上に乘て居る者がある十七八を頭として十二三の者を三十人ヨ

供を致し思ひ〳〵の物を持ている竹様は四ッん道におつて其上に乗て居るのは大河内勘兵衛の悴長四郎後に智恵伊豆といわれたる松平伊豆守になる人でございます　彦「是は怪しからん長四郎　長「へエ　彦「へエでは無い御主人を馬にして夫へ乗る奴があるか又君も馬あおなり遊ばすと云ふはどう云ふ譯で大勢の御家來のあります事ゆえ其中で大きさうな者の上におり遊ばしたが宜しうございませう　竹「往かん〳〵何れも此所に於て馬あした所が誰も〳〵歩きやうが悪い馬の歩き方を知らん奴ばかりであるから今日は予が馬になつて長四郎を乘せたがどうも馬は苦しい　喜「是は恐れ入りました若様へ申し上げます　竹「何ちや　彦「過日掃部頭を何か長蛇に疑らへて降参をおさせ遊ばしたと申する殿中に於て取沙汰を致します彦左衛門承たまはつて今日はお賞め申し上げやうと心得て罷り

出でましる　竹「ア、彦左衛門爺も老衰を致したなどうも往かん事祿をした　彦「へエ蚤祿を致しましたか　竹「其方に限ッて追從輕薄のない者と予は心得て居ッたが是へ參ッて予の言葉が宜いと申して賞めるか賞めると申すれ人を喜ばせる人を喜ばせる其原因は是即はち追從輕薄より出る事だ掃部は天下の大老あり其天下の大老たる掃部あるに依て予も若年あから閉捨てにあらんから左樣申した、然る所今日夫を賞めに參ると云ふは其方も捨置れん奴だ　彦「成程　竹「左樣な事を餘人が申すれば其時あそうではあい掃部は名智の者であるから幼年の竹千代に其功を讓りた者であると何故掃部を賞めて遣らん大老の掃部を賞めないで予の所へ參つて是を譽めると云ふは年卯斐もない奴だ其方と天正三年文珠山の戰闘に……　彦「ぞうも恐れ入りました　竹「追從輕薄は余の嫌いぢや早々退散を

致せ　彦「剛ひ　竹「又賞めて居るか　彦「どうも恐れ入りますし
たか、此所へ爺罷り越しておお賞め申しますアヽさうかと云つて
お喜こひ遊す御顔を見やうと心得ましたからさもなく悉でと
くお吒りを蒙むり恐れ入りましたと彦左衛門閉口をして退り
再たび掃部の方へ罷り越し　彦「尊公ばかりではおい某がしも
斯様〳〵云々若君のお叱りを蒙むつたと云ふ話しを致しまし
たから掃部も手を打て喜こび　掃「實ゝ末頼母しき御幼君であ
ると只管感心を致しました然るに二代の上様に於ては兎に角
國様の方へ御寵愛がお傾むきになつて國千代丸様に對し御相
續をさせやうと遊ばし尤とも是に就ては御簾中於やう様に其
思召し深い所から自つから將軍家に於ても竹様をお嫌ひ遊ば
すやうになり一旦國千代丸様を御家督御相續を仰せ附けられ
ましたる所大久保彦左衛門井伊掃部頭兩名の盡力に依て其說

を破り忽に竹千代様に三代將軍の御家督を讓るに至る彦左衛
門殿中評定の席に於て森川出羽守を一言の元に說き破るのお
話し

第二席

物には迷うと云ふ事がございまして御名智の二代將軍でがい
ますが何分朝夕およう様の申し上ける事や何かゝ尤ともに
聞へまして竹千代様が荒ふしい御氣性のある所から是をお嫌ひ
遊ばし自然お守り役を致して居ります土井大炊頭、酒井雅楽
守、青山大膳大夫此三人も大きに心配を致し又國様のお側に居
ります鳥居左京亮、平岩主計頭、本多上野介等は時を得て外の役
人まで此頃では御殿へ出て若様の御機嫌を伺ふのお是までは
一旦竹様の方へ行て御機嫌を伺ひ夫から國様の方へ出ますの
が近頃では國様の方へばかり參り竹様の所へ丸で御機嫌伺ひ

に出でません位ゐで其勢はひが衰ろへました、三名のお守り役は、困つた者と思つて居ります其内に前回にも申し上げました通り元和二年四月十七日家康公御他界になつて後何とぞ御城内も取込み居ります然る所大久保彦左衛門は家康公御他界の後別段に力を落したものと見へ暫らくの間煩ひ居りまして モウ此度は往くまいと思ふ位ゐ所が醫療手を尽して幸はいに追々快方に向ひ直り掛つて来ると彦左衛門の事だから早ひ髪髯花々として庭先きへ立出で 彦「喜内や、用人の笹尾喜内も大久保彦左衛門と云へば用人の笹尾喜内は附き人のやうになつて居ります男で 彦「喜内〳〵と云ふから来ないと思ふと来る多夥しい 喜「お召しでございますか 彦「イヤどうも春の長色は別段だな今日は大きに氣分も宜いから庭歩きをしやうと思ふがどうぢやア 彦「往けません醫者の申しますには成たけ

風に當らんやうにと申しましたゆゑ今少々御辛抱をあさいましモウ程なく御全快でございませう 彦「少しも早く落命して家康公の御手許へ参り御奉公を致し度と思ふからだ、別段病ひを恐れる事はない 喜「病ひを恐れる事はないと仰せられるは君にも似合しからんと存じます三代の御家督淳相續定まり竹千代様お乘出しを御見届けあつて後冥土へお出で遊ばした方が宜しからうと心得ます 彦「左様たないやどうも喜内余が悪かつたおりやア死のを止める當分死ぬのは廣すよモウどんな事があつても死ない誰が死ねと云ふのも死ない 喜「誰が死ねと云ふ者はありません 彦「左様ではない憎い奴だ口の悪い彦左衛門だから死んだ方が宜いと其方初め申したであらうぞうだ 喜「左様でおざいます申さん事はございません 喜「左様云ふ事を云ふ奴だ ○「申し上げます 彦「何

ちや　○「只今西丸奥女中が一人方お出でにおりました　彦「彦左衛門病中に諸方より見舞を奥れたが西丸奥女中が見舞に來ると云ふは不思議だあ　○「何でございますか内々御目通りを致し度と申しますが如何取計ひますか　彦「ウム内々と申すお れば内々で逢ても宜しい彼方へ案内をしろ。○「どうか御乘物の儘昇入れて貰ひ度と申します　喜「乘物の儘……ハテナ……宜し……苦しうないから駕籠の儘持込むが宜い」彦左衛門の屋敷へは樣々の者が參りますゾコデ乘物の儘案内を致して座敷の眞中へ差置ました　彦「西丸奥女中と云つて案内を乞ふたと云ふが何であらうか尤とも逢つたら分るだらう尤とも逢て分らん物はふいけれども逢て見やう　彦「御前お扮装をお改ため遊ばしたら如何で　彦「何の扮はん病人が寢て居る所へ參つたのだから見苦しい扮

装をして居るのゝ當前だから大事あい是で行く茶を出さんければあらん貰つた菓子があるから菓子を出せ成たけ古いのから先きへ出しなよ對手を見てから淨山出すが宜いと彦左衛門羽織袍を着てスタ〳〵出掛けました羽織袍と云ふ物は下等社會の着る物で上ッ方の召す物ではございませんが彦左衛門は構はん人でおざいますから常に斯樣な物を着て獨り喜ぶんで居ります北羽織袍を着て髭茫々とした尽で座敷へ這入つて見ると籠がちやんと下りて居る　彦「エヽ何誰かは存せんがサア此方へお出を願ふ家來共も居りません内々逢ひ度との事ゆゑ彦左衛門一人罷り出でました」と申しましたが何共返事がない如何る譯かと彦左衛門駕の引戸を開けて　彦「サアお出なさいと云ふと夫へ裾摸樣の袴羽織を着たのは宜いが毛の生た足がヌッと出た奥女中には剛い者があると思ひます内にズッと夫へ立出

でましたのを見るとる頭も禿て居りますお方が納福の徳彦左衛門の側へピタリと座つたのを見ると驚ろいた江州犬上郡彦根の城主井伊掃部頭殿でございますからハッと思ひ　彦「コレは〳〵御大老には異樣の御姿曾らく〳〵と引退つて衣類を改めやうとする　掃「苦しうあい夫で宜い〳〵と仰せられたが中々其儘にして居られる譯の物でない彦左衛門居間へ飛び込んで　彦「喜内〳〵慰の斗目上下を出して呉れ　喜「ソレ御覽あさい夫だから着替へてお出でなさいと申し上げたので、對手が西丸の女でございますから着紐てお出でなすつた方が宜いので　彦「そんな事を云ふお　喜「お月代をお剃り遊ばしては如何で　彦「そんな事をして居る間はないと俄かに彦左衛門衣類を改めて　彦「夫から茶を持て來る時に無暗に通入つては往かんぞ　喜「そんなに何も對手少々内談があるから其時には廊下に於てトン〳〵と叩け彦左

衛門夫に出る開けて通入ると許さんぞ　喜「そんなに何も對手が女だからと云つて　彦「馬鹿を申せ確と申し附けたぞ彦左衛門髮髻を急に取り上げる暇にも往かんから衣類を着替へまして再たび夫へ立出でました　彦「只今は無禮を致しました　彦「イヤ〳〵御病中とは申し何にも斯樣なる扮裝にて參つたる者は必らず衣服を改めるに及ばんに物堅い御氣性にて態々衣服を改められ甚はだ恐れ入つた　彦「過分の仰せを蒙むり恐れ入ります何御用でございて右樣の扮裝にてお出でになつたか掃「イヤ此儀に就ては其方に相談致さんければならん事が出來た誰も聞き居る者はないか　彦「イヤ家來共も遠ざけてございますから決して御心配には及びません」と云ふ時に廊下の隅をトン〳〵と叩く者がある　彦「何ちやと彦左衛門自身に立つて出ると　○「御茶を持て出ました　彦「さうかと云つて茶を請取

つて座はる又トン〳〵と叩くから　彦「何ぢや　○「お菓子を持参致しました　彦「さうか、又お菓子を持て掃部頭の前に出でお菓子を出したり何かして居ると又トン〳〵と叩く　彦「何ぢや能く叩いて五月蠅奴だと口叱言を云ひおから彦左衛門出て彦「何ぢや喜「内お茶もお菓子も出たか何の用ぢや　喜「御酒の仕度如何で　彦「イヤ夫には及ばん　喜「左樣でございますか一寸伺つて置ませんと反つて不調法にありますから伺ひましたとうも一口召し上がりませんと極りが悪いものでげしてな　彦「餘計お事を申すな　喜「ヘエー……と引退つて仕舞たが間もなく又來てトン〳〵　彦「五月蠅お何ぢや　喜「ヘエお枕とお蒲團を如何で　彦「そんな物は入らん何と思つて居る　喜「ヘエ年寄りのやうではない御病中だと云ふに中々驚んなものだと喜内は獨言を云ひながら立去りました　喜「度々無禮を仕まつり甚

はだ恐れ入りました只今も伺がひましたが何で左樣の扮裝になつてお出でになりましたか　掃「實は今日上より仰せられたる事がある其方は病中にして委細の事を知るまいが既に神君御他界の時も奥れ〳〵仰せられたる通り三代の跡目は竹千代丸と云ふ事は暑は定まつて居る然るに未だ三年を過ざる内に其お言葉が反古になつたと井伊掃部頭の言葉を聞た彦左衛門色を變へ　彦「三年經ざる其内に家康公のお言葉が反古にあつたと言ふは如何ある事でございますか　掃「然ば明日出羽守に於ては外樣大名一同をお招ぎにあり御披露に相成る由だが御相續の儀竹千代丸樣には御氣性荒々しきに依て更に國千代丸樣に跡目仰せ附けられるとの事である右の次第に就き掃部御意見申し上げたる所中々御聞濟もあらざる樣子他に是を不承知の者ありと雖も出羽守の勢はいに恐れ一言の意見を差挟む

者もあらざる樣子、如何にも殘念の至り、おれども外よ相談致すべき者も非ず彦左衛門其方は神君御他界の時御遺言をも承たまはる程の者ゆえ今相談を致すは其方の外にはない其方は病中ありと雖も明日御披露の席に於て是を說破るべき法はあるまいかどうぢや」と物語りを聞いて彦左衛門大きに驚ろき暫らく兩眼に涙を浮べて　彦「ア、流石は大老の職に在らせられる播部頭殿只今の仰せ彦左衛門身に取て滿足仕まつります此節に何の御沙汰もなく明日諸侯を集め御內々御披露に相成ると云ふ當日こそ幸はいなり某がし身命を拋うち必らずや國は奇怪至極何者が右樣取計らひましてどゝいますか　播「何事も老中森川出羽が致したるやうに承知致す　彦「ウム小賢しい森川出羽其儀あれば宜しうございます今より其用意を仕まつり御內々にて御披露に相成り明日は病中あから登城を仕まつり某がし身命を拋うち必らずや國

樣御家督の儀取消し大御所御遺言通り竹千代丸樣御家督御相續相成らやう彦左衛門乾度取計らひ申す万一其儀斯相成らざる節は某がし落命を致すまでの事必らず御心配御無用に存ずると云ひながら彦左衛門一間に斷入りましたが左右する內に持參致しましたのゝ日光樣御肖像の懸物でございます是を正面の床の間に飾り　彦「サア此御懸物に對し乾度彦左衛門取斗らひ御家長く御繁昌仕まつるべきやう致すべしと此樣子を見て播部頭暫らく其懸軸の前に拜を遂げ　播「其方の決心たまはり播部滿足致す彦左衛門何分にも明日の儀は相頼む　彦「委細承知仕まつりました直に笹尾喜內に申し附け御酒の仕度をさせ日光樣の御書前に於て互ひに盃を交し播部頭も心宜く盃の數を重ね更に万事の打合せ終つて再たびお籠に乘り其儀立歸りました然れば井伊播部頭が奥女中の姿をして

大久保彦左衛門の屋敷へ急つたと云ふ事を知る者は更にございません彦左衛門は掃部頭が歸りまするとうら始まつた病氣の中は宜いが治るが早いか喜内〳〵と呼んで居る邊には外の者を呼でも宜いにと愚痴を溢しながら前へ出ると　彦「聲を嗄して髪を取上げろ　喜「エヽ御前は御病中でございますが如何で　彦「イヤ病氣は治つたやいますがどうも御血色が本統でございません　彦「イヤ何か変たく治つた。と云ひ出したら利かない人だから仕方がないソコデ聲を嗄り髪を取上げて差上げる　彦「アヽ是で薩張したとうも脳だの髪はモヤ〳〵して居ると心持ちの悪いものだと漸左衛門何思ひけむお庭井戸の傍はらに出で家來に命令て水を汲せザブ〳〵其水を浴るそんな健康な爺はないもので何やら頻りに口の内で念じて居りましたが其夜は其儘臥所に入り

翌朝に相成ると　彦「喜内登城をするから供揃ひを致せ　喜「エヽ伺ひますが未だ御全快御本腹も致しませんでお登城に相成るの如何で　彦「イヤ苦しうない夫ぁ何時登城をしても掃いんと云ふ身分だ　喜「併し永らくの御病氣にて將軍家よりは再度御見舞を下し置れ天下の役人衆からは度々の御見舞でございまして然るに全快を致したと云つて披露もおく突然登城に相成りましては少々宜しからんかと存じます　彦「何を貴様が知つて居る彦左衛門病氣が治りましたと自分で云つてさう云へば宜い前より届けるには及ばん皆あさう言ふ手數の掛る事ばつかり行るから好かんサア登城を致す　喜「未だ夜が明けません　彦「困つたなどうも今日に限つてどうして斯う夜の明け方か遲ひかコレ喜内　喜「へエ愛に居りまする、モウ夜の明けるのを待ち草臥て居りまする内に愈々夜も明け御登城の刻限に

相成ました爰、お話し別れて二代將軍秀忠公より森川出羽守へ對し内命あり大勢の諸侯へ國千代樣御家督の儀を御披露に相成るに就て御評定に及ぶのお話し

第三席

大久保彦左衛門忠則は早朝より病中なりと雖も剛毅の人でございますから梳づり高端の用意を遂げ御開門を待て登城致しまする此所にお話し分れて子に迷ふと言ふことは上方でも下方でも同じことでございます御仁君と言ふ聞えのある二代の將軍秀忠と言ふ御人も三代の跡目は竹千代たるべき由を仰遊ばされましたるのを能く御辨へであらせられるから御台の朝夕御側にあつて御諫言申す所から近頃は國千代殿へ御心かたむきまして殊に森川出羽守と言ふ者が始終御取成しを申して當日に於ては表廣書院に於て御内沢に相成りまするのでご

ざいます將軍家は二重合の上に在せられ是は御一言も御發し遊ばしまするものではない御老中方はじめとして若年寄大目付御目付御小人目付一同相列んで居ります取分けまして本多上野介、鳥居左京亮、平岩主計守、是は森川出羽守と約束をしてある、愈々國樣御家督に相成りますれば出羽守と言ふ人も幾分かの益のありまするものと見へ月番の老中出羽守半の所へ控へて居ります此時に當り上樣が　秀「出羽〳〵」　出「ハヽア」　秀「今日一同の年寄共を是へ集めしは予も追々に老体にも相成ることゆえ西丸を定めんとの心得依て予の意見を一同の者へ予に代て其方から沙汰致しまするやう」　出「ヘヽエ」出羽守御受けを致し稍あつて頭を上げまして居列んで居る大勢の人々をヨロリッと打眺め　上扱方々へ申入れる唯今上意として予の意見を銘々へ沙汰致せとの仰せ、して見れば唯今より出羽申すこと

は、將軍家上意も同樣と御聞きなりを願ひたい豫々上樣にも思し召し深く三代の西丸御定めの儀は一時竹殿へ仰付けられし計りに相成りし所竹千代丸殿は唯御勇氣に致して最も御壯健に御在で遊ばすと雖も餘り殺伐にして天下を治むるの器でない依て國千代殿へ對し御相續の儀仰付けられ度の御召し是れ御尤もの思召しかと存ずる申すもおそれ入ることあから竹殿は動もすると小姓御對手の者を召連れ御庭先きに於ての荒々しき御遊びのみ遊ばす、之に引替へ國千代丸樣は御學問に御心を入れ又武藝は勿論のこと御指南を遊ばする若何れも勝ろく位名智勝れて御在でなさる聽明銳智と申しても然るべきに依て國樣へ對して御家督の儀御仰付けらるゝの今日は御內命あれを亦若しも意見ある者は此所に於て斯く申する出羽へ對して仰せを願ふ出羽一々御答を申上げるの心底國樣西丸入り御差

支nでさいますまいか各々方御異存がありますれば此所に於て出羽確と承まはつて其儀に就き、二三御物語りを致したい後ろには將軍家が御在で遊ばす、然る所、當日に於ては酒井讃岐守青山大藏大輔、土井大炊頭と言ふ此三人が出ません何故出ないかと言ふと土井大炊頭と言ふ人は下總の印幡沼を新田開發と申し其頃はいにでざひましたそれを大炊頭が嘆いて昔よりして印幡沼を新田開發と言ふことは容易に出來得ることではあいと依て其儀に就て御意見を申上げたる所が見聞をせんと言ふ內命があつて土井大炊頭が佐倉へ出張をして居る酒井讃岐守と言ふお方は御病氣青山大藏太輔と言ふ御人は名智の御人ではありますけれども其枝葉の点に至りましては聊か下る所があります所か今日の評議へ出て何う斯うやると言ふが出來ないものでございましたか病氣の披露を致して當日御出席か

ないそれを森川出羽守は目板て居りますから俄かに此評議を致して西丸様を定めやうと言ふことにありました、先づ此所で何う斯ふと言ふ肝腎の對手になるべき者は居ないから誰れ一人之に異議を唱へまする者はおいと言ふ譯は其前々御大老播部守殿ですら此儀に就て御不興を蒙り御謹しみ中御大老の播部守が謹しみを吩咐つて居る位なみとでございますゆへ若年寄其他相列んで居ります役人達かそれは往けませんと言ふ者は一人もございません座中水を打たゝ計りでございます出羽守胸中にしてやつたりと思ひまする中にも鳥居左京亮、平岩主計守、本多上野介の三人は先づ思ひ通りよ往つたと思ひ上様に於てゝ大層それへ心か傾むいて居るものでおざいますから胸中悦びの体出羽守言葉を繼で

出「御一統何の御一言もないの

は竹様御家督除き同意西丸入りに就て別段御意見のないやう

に考へる然らば當月十五日諸大大献上の儀に御禮受けに於ては國様へ對し仰付けられる此段一同御心得あつて宜しからう

○「ハヽツモウ御禮受けを遊ばして西丸御乗込みにおれば御家督相續したやうなものだ此所に於てハツと頭をそれへ下げまりたいと魏の陰に申する者がある其儀暫らくぢ止まりに預かしたを時に恐れおがら申上げます其儀暫らくぢ止まりに預かあいから扨ハど思召して上様お於ても病中の彦左未だ全快の届け披露もおく斯様なる評議の席へ出る氣支はないと思つて居たけれども其聲を聞て大ひまお驚き遊ばされる一同扨はと思ひましたる時に大鶴を聞ひてそれへツカ〳〵と現はれ出ました彦左衛門に於ては座の半へ來てヒタリと相控へた時に見ると拜領の御紋服上り藤大紋付の肩衣を着けまして朱天鷲鷹の頭巾です、何と登城するのに彦で周圍が出來て居る紫天鷲鷹の頭巾です、何と登城するのに彦

左衛門頭巾を冠つてやつて來た此頭巾が大變に由來のある頭巾駿府大御所の御繁昌の頃はいに竹千代丸樣よりして御獻上にあつた品、竹樣がさう云ふ譯で御頭巾を獻上したと云ふに江戸表へ一時御入でになつて久し振りで孫共の顏を見ると被仰つて大御所が御留まり遊ばして十三日の間御所内に御在で遊ばしたおとがございます其時お日々國樣、竹樣を傍へ呼で行ひを御覽遊ばした御立ちにおらうと云ふ時に御酒宴があつて其御酒宴の砌り御側に控へて居たる土井大炊頭へ仰付けられ紙裂捻を拵へ其紙裂捻を以て御酒を召上り餘念なく御孫達の顏を見御家來達の武藝なぜを御覽遊ばして御悦び遊ばして被入しつた大御所の御頭を突然に北竹樣が紙裂捻にて縛りました大「竹殿何をあさる是は又御戯れか竹殿」竹御祖父さん少し御頭を拜借したいと御頭の周圍を計つて其紙裂捻をば土居大炊

頭へ御渡し遊ばしたさうも大御所も北時は氣が付かないでアゝ何をなさるか」と思つて居た所が駿府へ御歸りあ相成りまして間もなく御年を召して御伯父樣も嘸御頭が冷るであらうと云ふので竹樣が御獻上遊ばしたのが此天鵞絨の御頭巾であります朱天鵞絨で周圍を取て紫天鵞絨の頭巾と云ふのであります北時には大層御悦こび遊ばしたアゝ是は竹殿が御心得であつたか道理で彼の時頭を斯う紙裂絨を以て縛られたと思つたが扨は御形を御取り下すつたのか其時に大御所よりしてどうか彦左衛門も老体に相成て居るから彼れへも此通り造つて御遣はし下さいと云ふことを大御所から御頼み遊ばした御言葉に依りまして其儘拵へて彦左衛門へ下し遣れました左れば彦左衛門の杖襟巻き御免と云ふのは後のことでございまして其襟

巻と唱へまするのは誤まりで實は此御頭巾のことけれども寒中は知らんこと暑中紫の天鵞絨の頭巾などを冠っては歩けませんが彦左衛門は大切にしてありました品ゆゑ今日は例の御頭巾を冠つてやつて來た扨一同の人々之を見たが是は大變だ彦左衛門頭巾を冠つて來た彼の頭巾を冠つて來た時にはどうして大低なことは聞きやアしない森川出羽守様子を見て居たが出是は〳〵唯今暫らくと言はれしは彦左衛門であらせたか

彦「如何にも拙者だ恐れながら上様には麗はしき御尊顔を拜し親爺身に取りまして大慶を申し治め奉まつる

秀「オヽ彦左、病氣の様子大いに予も心痛致したが其方快氣致したか

彦「ハヽッ戰場往來の彦左衛門病氣の爲めに倒れまするやうなる左様者ではございません彦左衛門の命と云ふものは國の大事徳三家の大切の折りからに失ひまする命病氣の爲めに捨まする

やうな親爺ではございませんどんな病氣でも彦左衛門病氣では死ませんなぜう云ふ强情な奴！

秀「最早快氣致したか

彦「ヱヽ全快仕まつりましてございますから今日登城仕まつりまして上様麗はしきを拜し彦左衛門如何計りか有難く又今日は御内諾と承まはりましたが申すも恐れ入り候やうあれども元和二年四月十七日駿河國賀機郡駿府の御所に於て大御所御他界に相成りまする其折り上様の御手を引き奉まつり川越の天海僧正斯く申す彦左衛門の二人は即ち上の御遺言を承まはりましたもの万事天下の後見は天海へ頼み政治の儀あ就て万事彦左衛門に相談をせへと云ふみとは憚りながら其時に大御所の御一言のやうに彦左衛門覺へて居りました然る所今日は何か西丸様を相定めるの當日何故ありて此彦左衛門へ對し御沙汰はございませんか其儀承まはりませう」上様ギョッとし

た　秀「それは彦病中と承まはりしゆゑ……」　彦「假令病氣たりと雖も息ある中は即ち一言仰せ聞けられ下し置れましても御宜しいからうかと彦左衛門述懷を述るやうではございますが併し是は上様の預かる所ではございません、第一に彦左衛門へ無沙汰にて斯樣西丸樣を相定めると云ふみとの評詮を開くと云ふのは全体此森川出羽守と云ふ人が第一の落度かと相心得ます併しそれは病中の彦左衛門最早一命旦夕に迫ると云ふの折沙汰致した所が別段に役にも立んと云ふの御看做しがあればそれまで是までの儀を遡ぼつて彦左衛門申上げは致さん尤も西丸樣を相定めるとの評詮は地体是は無駄な譯で西丸樣は竹樣と云ふことに相定まつて在しませう然る所外々よりして西丸樣を定め給ふ三代の家督を御相續と相成る人はあらう筈はない何の今日は御評儀におざいまするか恐れながら上樣

より承まはりたう存じます　秀「出羽〳〵左衛門へ申し聞せ〳〵心得ろ　彦「ハアー恐入る　出「エヽ彦左衛門上意であるから左樣出西丸御乘込みの儀は上意とあらば謹しんで拜聽仕まつる月十五日諸大名御献上の節御禮受に於ては同時に國樣へ對し仰付けらるゝ筈左樣思召しあつて宜しからうと云ふ譯で竹樣は西丸御乘込みは相叶ひません竹千代樣御身の上に何か犯せる罪でもございますか其邊を其許から承知致したい　出「差當り犯せる罪と云ふてはございませんが併し御氣性荒々しくして御學問を御嫌ひ遊ばし平素の御遊びおと荒々しく再々小姓等を對手にして荒々しきことのみ遊ばして居る左樣なことでは德川の天下三代の相續は覺束ん上の仰せに依て即ち國千代樣へ對し御相續を仰付けらるゝことに相成りまし

た

彦「ハアー御勇氣荒々しいから三代の天下にいられん西丸伊乘込は出來ない」「ハヽアー」是はどうも彦左衛門年は老りたいもので珍らしいみとを承知致した柔弱情弱にして物の役の立んから其家を繼せることは出來んと云ふことは上下共に是れある事だが勇氣勝れて居るから成らんとはどう云ふ譯夫れ物は三代と云ふ所が一番六ヶ敷もので何に依らず三代八代をば十分相續を致せば數十代數百代相續の出來得らるゝもの三代八代の天下と云ふのが悉とく六ヶ敷恐れながら日光樣は智を以て御治め遊ばして當將軍には御仁君ありとて下萬民皆口になす所即ち仁を以て天下を治め最早三代の君と相成れば勇を振はなければならんと云ふのは治に居て亂を忘れずで一時天下は太平のやうなれども豊臣取立ての諸侯其他戰場にて討死なしたる者の親族は直ちに德川家を恨み亂を起すやも計り難

し其時に當り御勇氣十分勝れたる君ならでは迚も天下を握ることは能はずして萬民塗炭の苦しみを防ぎ萬歳樂を唱へることも思ひも依らず伊勇氣勝れて在で遊はすから西丸入りは出來んと云ふは新らしき御一言と私しは心得る夫とても將軍家思召しに依て森川出羽之を受繼で其御沙汰致すことあれば是非に及ばん彦左衛門の如きが此場に豚を容れべきではないが今日は斯く御拜領申したる御頭巾を首に戴き尚評諚の席へ罷出るからは唯默して居る斗りでない冥土黄泉への御使者は出羽其許があされるか……

出「エヽッ」彦「サア御他界の折から上に於ても念を入れ御遺言百ケ條を殘され其中の第三に德川の跡目相續の儀は竹千代たるべき由仰付けられたる時に將軍家にも此段御受け遊ばしたることは能く彦左衛門の腦裡に殘つて居る然るに只今の通り思召しを轉して國樣へ御相續と云ふこ

となら彦左衛門の如き親爺は思ひ止まつても宜いとした所がお父上の御一言を御背き遊ばすやうな御不孝な君ではあるまいと思ふ是は大方日光様へ此段を御照會に相成り上より致しての御沙汰を待つてのことゝ心得る其黄泉への御使者は何れ月番老中の致す所何時頃森川出羽守冥土へ出立を致されるぞ又歸りは何時頃であるか其邊を彦左承知を致したい出向ひにも出まかれば何時冥土へ出立をしあさるか」出羽守驚いた何處の國に冥土へ行て來る者があるものか　出「かゝアー　彦「ハアでは無い私しに天下の家督を定めると云ふことは出來まい日光様へ御伺ひの上將軍家が左様思召すなら國千代にせへと云ふものか但し一旦予が申付けたる通り竹千代を以て相續致さして宜しい必らず方針を變ることはならんと言ふの仰せがあるか萬事は日光様の御意見に任せあければあらん筈、然る處それ

を此場に至つて唯私しに取極め西丸入りの國千代へ仰付けられるのヤレ諸大名の御献納の節御祝受けは國千代殿と私しに取極めては相濟むまいと思ふ將軍家何と思召すか何者を以て黄泉への御使者仰せ付けられますか其邊を承まはりたう存じます拙者の考へでは月番の老中あり殊に人才勝れて居る能く人を捌釣りまする此森川出羽守へ大方は仰付けられやうと心得ます併し萬々が一出羽守黄泉への御使者迷惑と言へはそれまで德川家への御奉公終ひ斯く申す彦左衛門黄泉へ參り日光様御心中を承まはり改めて此處へ御披露致す然ばら宜しく親爺頼むと言ふ御一言があれば明日を待ず彦左衛門當御席上より冥土へ出立を致しますする覺悟甚だ恐れ入りましたるが御免を願ふと兩肌を寛いたる時に名々は見て驚ろいた彦左衛門常にあい下に白無垢を着用致して水昌の珠数を首へ掛けて

居る即ち川越の大僧正と言つた天海から貰ひましたのておさいます其貰つた珠數を首へ掛け樓現樣より御拜領に相成たる御頭巾を冠り隨分不思議な扮裝です丸で判じ物見たいです此時彦左衛門四邊を見て居たが出羽守暫らくの間其答辨に苦しんなる樣子それを見るより少しく襟を改めて御遺言百ヶ條を出し二代の將軍秀忠公へ御諫言申し三代の跡目相續と即ち竹樣へ仰せ付けられると云ふ彦左衛門、誠忠の一件に相成ります

第四席

綸言汗の如く上意風の如し貴所方の言葉といふものは一端出ましたるみとは勸めて負ふことと能はず再たび變更するといふことはどうも出來ませんもので將軍御他界よ相成りまする其前遺言の中に西丸御乘込み万端のことを仰せられたるみとは

二代の將軍秀忠公の腦髓に染て居りまする所誠に一時の心得違いで國樣御家督と思つたに彦左衛門案の如くそれへ罷出まして下に白無垢の用意をして參つたのは申すまでもない次第に依れば此場に於て切腹をも致すの心底なれども彦左衛門に腹を斬せるみとはなか〳〵出來るものではあい暫らくの間上に於ても其言葉に苦しんで御在でゐさる主任として居る森川出羽守の心中どうも諸らんことであると考へて居る彦左衛門は此時に當り出羽守の顏を見

彦如何に出羽平素は彦左衛門は族本なり尊公は月番老中おり呼捨てに致すべき彦左衛門の身分ではあい今日は改めて其方を呼捨てに致す彦左衛門が致すのではない日光樣より致しての仰付けだ其方は當將軍家の代理者として今日御内決の儀に就て言葉を開く斯く申す彦左衛門は固より致して黄泉に在する家康公よりの御遺言に依て

其代理者とあつて其方に問答を致す全体此儀に就て其方黄泉へ參つて其實國様御家督に相成りまして宜しうございまするかと言ふことを承まはつたかな　出「どうも彦左衛門の申しある黄泉へ參つて尋ねられることが出來得ることではあい　彦「出來るものでないと言へば自分の了簡にて天下三代の家督を定めやうとしたのか豈や當將軍は左様なる御不孝なるお方ではございますまい察する所出羽其方が扱かつて致したのか　出「エヽッ　彦「サア、エヽ、ではない當將軍家に於ては確かに御遺言をも御承知で被入せられ殊に御孝心厚き御仁君のみとゆへ唯今に至つて己れの心を翻へして竹様家督を除いて國様へ對して西丸御乗込みを勧める氣支はあい恐れながら將軍家には左様なるみとはございますまいな、あると言へば此上もなき御不孝左様な御不孝を遊ばすお方、ではない」とイヤに彦左衛門に

持込れたので上様が正逆に吩咐たとも言はれあい然うなると家來がそれ丈けのみとを引受けあればあらん　秀「出羽守出「ハッ」と上様の顔を見ると上様が眠で知した出羽其方が脊負て呉れと言はん計りに眼で知らす出羽守仕方がない、上様に於ては　秀「彦左其儀は予の志しを以て西丸乗込みの儀を申出たのではない萬事月番の申出により……オヤ〳〵出羽守唯た一つの腹をおくした　彦「左様でござらう出羽守己れの心一つにて國様西丸御乗込みを勧めやうと言ふ心底と見へる將軍の御心の中に左様なる御不孝のことあらざるみとは斯く申する彦左衛門能く存じて居ります出羽、其方は上様より別段み國千代を以て三代の相續と致せと云ふ御言葉もないのに如何に月番の老中天下の政治を與かると云ふ大任を帶て居ればとて私しに此事を致すと云ふは第一に日光様へ對して不忠又將軍家の

即ち御心に背くと云ふは甚だ怪しからんこと、冥土へ參つて尊ねて來た譯でなく私しに天下の三代の御家督の儀に就て自分の意を貫ぬかんと致するを他人之を聞く時には野心のある者と思はれても是非よ及ばん餘人は知らず彦左衛門眼中より見る時は先づ老中森川出羽守は、ノロマな者と見へる忠義の武士と見へる、天晴れの武士と見へる」何ぼ上たり下たりする出羽守仕方がないから頭を下げ出「平素より致して竹様の御氣性荒々しく思召しに叶はざるの所を存し居りまするに依て國に様御家督にでも相成りしあらば嘸かし御滿足であらうと思ふより西丸御乘込みの由を……彦「それが宜しくあい御勇氣荒々しければ其上、もあいことではないか今三代にして天下既に亂れんとするの時に臨んで御勇氣十分に勝れて被入つしやる君があつてこそ國様には即ち御料地を下し置れ百万石なり二百万

石ありを下し置るゝは即ち東照君の思召しに依た所竹様も亦ければ、イザ知らず竹様の御存中斯様おゝとをおしては相成ら左様相心得ろ是は彦左衛門が申すのではあい日光様の御沙汰を受て其代理者として示す當月十五日諸大名御献上物禮受けは日光様御言葉の通り竹千代丸様へ仰付られて御宜しう存じます森川出羽守の儲は既に日光様へ對しての申譯け當將軍家へ對し私しに天下の政道を取んとなしたる所の大罪もあり切腹をも仰付けらるべきあれども是は格別の思召しを以て日光様より御許しに相成て出羽の儀は暫らくの間謹しみ仰付けらるぞ左様相心得ろ」謹しみにも色々あります又閉門にも色々おざいますが限りない閉門と云ふことゝ中々六ケ敷いものでおざいます五日の閉門とか十日の閉門とかありますが何日と云ふ限りのあい閉門を此時出羽に仰付られましたどうも

大きに不都合な御話しで左らば一説には閉門中に切腹したと云ふことがございますが其中に權現樣御年會に當りましたに就て許されたと云ふのが實際のやうでございます併し是は後のお話しておきます大久保彦左衛門が即ち權現樣御遺言百ケ條を此所に於て嘆々く示したが能く記憶致したものでございます其場に至りまして少しも書物を以て見て讀むのではない百ケ條のことだけは能く暗誦して居りました天下の政治即ち德川の掟でございます是は總て其處に於て述ました此時に二代の將軍家も實に御慈き遊ばしたのは彦左衛門は唯戰場往來の自慢計りして居る動ともすると老中、若年寄を捕押へて戲談をしたり何かする計りなるが然うではおいなかく役に立つ所へ參りますると大したものでおございます此所に於て述られたに就て其間と云ふものは數十人の者は首を下て居る之を將

軍家も久しく御聞取りに相成りました手前も申上げたいがやうも御遺言百ケ條は存じません從じめ御話を致します初めて出羽守恐れ入りましたると云ふの一言を發し其日の內御評議が此處に一變致し愈々一同の者が退出致すと云ふ事に相成りましたる時に鳥居左京亮、平岩主計頭、本多上野介の三人に於ては廊中に悉とく彦左衛門を斯う睨んで居りました取分て本多上野介は一時大老にも相成りました位の人で悉とく意見を通ましくした人でございますけれども權現樣御遺言とありやアどうも本多であらうが平岩主計であらうが一言も是へ通することが出來ません一同の者は退散を致しまする改たまつて彦左衛門將軍家へ願ひ奉まつりましたのは　彦如何に日光樣御遺言とは申しながら火勢の中へ斯樣なる異形の姿を致して能越し將軍家へ對して迫りましたる段親爺恐れ入り奉

まつりました願はくは彦左衛門當席に於て切腹を致す何卒御許しを願ひたい是は許しません譯はない素より忠義の爲めに致した譯であります上に於ても御滿足に思召し　秀「コレ彦左衛門切腹には及ばん」と仰せられまして其砌り彦左衛門に對して御拜領物があります軍御秘藏に遊ばす御印籠を彦左衛門へ下し置れました彦左衛門有難く頂戴して此御爺さん理屈を言つちやア色んな物を貰つて來る扨此事を御聞取りに相成りました時に御悅びに相成りました所は即ち竹千代丸樣取分けて彦左衛門の言葉に依り井伊掃部頭に於ては謹しみ御免にありました掃部頭も御悅び遊ばしたそれから日も七八日經ちまして竹樣御目通りを願ふと云ふので彦左衛門出でました所が下々の者なら自分が相續をしやうと思つて居た所が他から來て其家を繼ぐ者

が出來る仕方があい諦らめもするが腹の中では面白くないと思つて居る所へ通ひ當頭が出て來て其身上を改ため家督を繼して、呉れたも同樣だ對面をする下々の者あらァ……大きに彦左衛門お前の御蔭でと申す所だがどうして竹樣御幼年であれば　竹「彦左、其方は病氣の由である予も心を痛めて居つとそう云ふ處へ來ては何の彦左衛門へ對して御禮を述る所ではあい　竹「彦左、其方は病氣の由である予も心を痛めて居つたが全快をしたか　彦「エヽ全快仕まつりました久々にて竹樣御目通りを願ひ罷出ました何時も御壯健、の御樣子、彦左衛門大悅を申上げます　竹「ヤア然うが死では往かんぞ親爺　彦「ヘヽ　竹「今十年の間彦左死ぬな確と申付るぞ」彦左衛門驚ろいた死ぬなと云つたは思か何でもあいやうだが先見の一言で彦左衛門死ぬな今死では往かんぞ十年の間は死なぬと彼仰つたので眼にどうも確たることと今其方が落命を致す時には天下の亂に

も相成るかも知らず斯く申する竹千代の心の中を察し呉れ死一で呉るお彦左衛門をうぞ遠者で居て呉れと細やかに被仰るより淡泊にも死な今十年は死あゝ被仰つた其時に彦左衛門ハッと悅んだとうも天下の跡を繼ぐべき御方は言葉少なくして其意味迎するとは此事だと頭を下げて居りました彦左衛門

彦「宜う仰せられ下し置れまし た恐れながら竹様御西丸御乘込みも近々御三代御相續に相成り天下太平萬民萬歲樂を唱へるのを見聞致しまして日光様へ萬事を申上げまする心得彦左衛門何やう申してもなかなか十年經たら直に死でも宜いだ

彦「ハア然うか十年は死ぬお前代り十年經て側ゴ控へて居つた者が十年は死なと云やうも有難い仰せ……

竹「ハア然う彦「是は竹様なら十年は死ませんと云ふ仰せも仰せだ是は怪しからんとだと思つて居る必らず死ぬなと云ふの命令を下

じ置れました此時に至りまして下總の印幡沼實檢の爲めに參つて居られましたる土井大炊頭殿が漸々御用濟にて立歸りました右の次第を承知致しましたるものでムりますから悉とく御悅こび遊ばして直に是より彦左衛門を招いて委細の物語りを致したが此邊りは餘程德川三代の天下は面倒な所でございますけれども彦左衛門と云ふ名士が附て居りますし土井大炊頭酒井雲州守と云い井伊掃部頭殿等が保護致して居ります途に西丸御乘込み相濟で諸大名御獻上の折から御禮受けも滯りなく仰せ付けられました然う斯うする間に將軍秀忠公には宜下に相成りまして竹千代丸殿下は三代の家光公と申上ぴます國千代殿に於ては駿甲相三ケ國を領し百二十万石を下し置れ御位は大納言に御進み遊ばしたのが彼の駿河大納言忠長公であります然る所が二代の將軍家既に宜下ならせられま

したるに就て一時天下の役人を召して即ち上様金王の名論を吐て御幼年ながらも天下の役人の活膽を寒からしめまする二條に相成りたす

第五席

前回にも申し述べたる通り徳川の天下に就ては南光坊天海大久保彦左衛門あんどの尽力は別段でございます此彦左衛門の尽力で三代の御家督も定めたと云ふのは能く人の知る所でございますが茲に此二代の新將軍秀忠公と仰せられたお方諄和曹學両院の別當源氏の長者征夷大將軍徳川の二代を御相續ありました獻徳院殿と申しました此御人は天正の卯の三月二十七日に御誕生を遊ばし寛永九年正月二十四日卒せられました、五十四歳にして御他界に相成りましたが御仁君でございます然れども能く申します智仁勇で納め初代が智を以て納

め二代は仁を以て是を納められる三代の家光公は勇を以て天下を掌握したと云ふ事は能く三歳の童子も申します此二代の將軍家に姫宮がございましてお子様が澤山あつたお方だと見へます藩輪講にも七人の子ありと云ふ事が書てございます其邊から見ると餘程どうもお作前が目かつたと見へる公武御合体と云ふ事を常々仰せられてありましたが是はどうもさうのうてはなりません京都と關東とがスレ〳〵で居りますやうな事では和合する譯にはありません事をおさんと云ふのには何れも和を結んで居りますお越しした事はない京都所司代は其頃はい板倉伊賀守勝重が勤めて居りました伊賀守勝重と云ふ人は徳川の忠臣でございまして京都へ參り所司代の役を暫らくお勤めにありましたのは實に公武合体をしてどうぞ此内端を結ぶと云ふ所から板倉伊賀守が抽でゝ所司代を勤められまし

た又京都に於ても伊賀守と云ふお人は大分評判の宜い人でございました京都所司代に相成りまして三日の間休息をして四日目に龍顔を拝し天盃を頂戴すると言ふのは儀式でございます伊賀守が參内を遂げ十八段の機階の許に控へて居ります夫より之て案内よ進れ機階を登り恐れながら十善万乗の君玉座近き所に進み出でまして此時に龍体を拝し奉まつります勿論龍顔を拝し天盃を頂戴すると申しましても眞正に龍顔を拝す事は中々許しません恐れながら上の事を龍体と申しまするのは龍に仮令たのでございます、上の召して在せられるのが衮龍の御装束を拝しますのを龍顔を拝すと言ふ事に仮令たものでございます天盃と申しまするのは本來自からお盃を上げて夫を下し置れましてとそ天盃であります御手に觸れます物ではない持て居ります筋が少し働きますを直ぐあお盃を下し置

れます勿論お土器でおざいましてそくいと申しまして お土器を下し置れる是が即はち天盃を拝し龍顔を拝し奉まつると言ふ事でございます此時に御側に控へて居りました櫻戸中納言殿ふ言葉を上げ櫻「關東の武士禁裡守護職板倉伊賀罷り出でましたと言ふお言葉に從がつて夫へ進み出まして此時に前に下つております鳳簾か少し上ります、十善の君の御前に下るのを鳳簾と云ひ院の御所に下るのを垂簾と申し將軍家の前に下るのを御簾、同じやうではおざいますが大層違ひます、垂簾と云ひ鳳簾と云ひ御簾と云ひ女義太夫の前に下りますのは那ば筵……筵は正逆に下げはしまい簾……でもあい其下がつて居ります鳳簾と云ふ物は漸々其八寸位ゐしら上がらんものだ將軍家の前に垂れて居ります御簾の方はお胸の邊りまで上ると云ふ事であります今八寸程鳳簾が上りました伊賀守恐れ入つて

頭を下げますれば夫で天盃を頂戴致しまして式は終るのであります」が伊賀守少しも頭を下げない此時櫻戸中納言殿「櫻」伊賀精しく龍顔を拝したるが此時伊賀守勝重勝恐れながら未だ龍顔を拝し奉まつりません中納言殿苦笑ひを遊ばして「櫻」關東の武士は武骨にして其柄を辨まへざるか、只今御裝束を拝し奉まつりしは其龍体を拝したるも同様龍顔を拝し奉まつりしに相違あるまい　勝「イエ御裝束の端は聊か伊賀謹んで拝し奉まつりましたが龍顔を拝したる覺に聊かもございません　櫻「龍顔はくと龍顔を拝し奉まつりたう存じ奉まつります斯様申する關東のお武士は不骨にして能く其禮式を知らざるやう思召す恐れいり候へ共一度京都所司代禁裡守護職の大役を仰せ付けられたる以上は万々が一非常の場合に上に於て御立退遊ばされるに龍顔をも拝し置されば万一の事ある時に甚はだ不都合在らせられる其時に守護奉まつるは即ち某がしの職掌なり

然るにして實に役目として恐れ入つたる事なり願はくは龍顔を拝し奉まつりたう存じ奉まつります」と其言葉と言ふものは懸河の流るゝが如く滔々と申し入れたる時に十善万乘の君喜悦斜ならず非常の折柄に君立退にも相成る其時に守護致して行くのは京都所司代禁裡守護職の役目であるから龍体を拝し置なければ万一の時に一大事こそ出來致しまするから、ソコデ龍顔を拝したいと申しましたるは即ち忠義の心より出た一言でございまするから中々逆鱗と云ふ事はおく喜悦斜ならず、勅命して許し遣はすと云ふお言葉でございます、其敕命ふ依て鳳輦を高く上げまして鰥とに龍顔を拝し奉まつりましたのは伊賀守で天盃も夫に準じて矢張そくびを御手に觸させられまして伊賀守に下し置れました京都所司代をお勤めに相成たお方も

澤山おざいまするが其との龍顔を拜し天盃を拜し奉まつッた
のは伊賀守一人だと申す事此時お止め遊ばした櫻戸中納言殿
は反つて御不首尾でございまして百日の間閉門を仰せ附られ
ましたスルと櫻戸の門へ張札をした者がありまする『昔への梅に
も懸りず櫻戸は』と是は彼の阿部宗任のことを申したのでござ
いませう、八幡太郎義家には陸奥へ乘込で宗任と云ふ者を生捕
り致して牢輿へ乘せ之を宮中に引たる時に暫らくの間彼の淸
涼殿廣庭へ差置て奏聞を遂て居りまする間に柱中納言と云ふお
方が宗任を見に被入しつた見ると牢輿の中に鬼髯を生じどう
も怒れる顏色何とあく物凄い天下の英雄でございまするれを
見て居た中納言樣が是が宗任と云ふ者かと思召して側よりあり
ましたる梅の枝を一枝折りました宗任の前へ手を仕て、柱輿
州の実是は何と申する花なるか知るか如何にと云つて御尋ね

なすつた宗任其時に眼の中で怒つたのなんのつて何程夷だと
侮つて是は何と云ふ花だと言つて尋ねるのは近頃人もふびな
る擧動おりと思ひ宗任牢輿の中に大聲を揚げ　宗「我が眼には
梅の花とは見つれども大宮人は何と云ふらん」其時に桂中納言
はハッと言つたが一言の挨拶も出來ぬ我が身には梅の花に
は見えれども大宮人は何と云ふらんと云ふ歌を以て答へられ
たる時には中納言殿も左しもに突出した梅の遣り場がなく
つて仕舞つた仕方があいから梅の枝を頭へ載せて袖を組で豐
年ぢやく〳〵と踊つた、正逆中納言樣が豐年じやなんぞを踊りは
しない其時に梅で耻を搔き櫻で耻を搔たもんだからモウ花牌
を拵へないと云ふのをそれからメクリ牌を拵へ出したから近
頃になつて花牌が安くあつて一粗三錢位で可なりのがある、其
樣なことは別段申上げなくても宜いー扨龍顏を拜したる其時

より至極御意に叶い尤も役目を大切に致して居りますからと
うも京都の評判悪しく御宜しうございます途に近衛關白殿下
へ出入を致しますことにありました近衛殿は飽くまでも是は
關東最負の御方でございますに依つて其中に追々近衛殿下に
對して板倉伊賀守より致して其取成しをあしたものでおざい
まして公武御合体と云ふことになりました天下は一人の天下
にあらず天下の人の天下あり恐るべきから十善萬乘の君は高き御
位にあつて下の低きを御思ひなく四民の事を能く御存じあり
ません唯今四海浪穏かとは云ひながら此上共に公武御合体に
あつて居れば此上もなきことに存じます近衛殿夫に對して度
々申上げる近衛殿に於ても至極是に御悦び遊ばして二代の將
軍の第二番目の姫宮をかゞ子様と仰せられ御容色も御美くし
うございまして是が一番の愛子で御在で遊ばす此お方は人皇

百八代の後水尾院と申します此帝に對し奉つる皇后に奉つる
ことに相成りましたから此邊りは大分堅苦しくおりますから
大略して申上げますが此儀成立ちましたので京都へ御出にお
りました此かゞ子様が即ち後に東福門院と御改め遊ばした御
方、此東福門院様の御腹へ御嬢姫遊ばしたお方が即ち後に至り
まして明正天皇と申し奉まつりまして最も温德の是亦溢れま
したるお方でございます此儀は其本文でございまするが伊賀
守が萬事の働きでおざいます近衛殿の御計らいに依つて此儀
が纏まりまして愈々事柄が十分に相成り恐れ多くも帝へ對じ
ましてかゞ子様御越しに相成りまする扨それより三年を經て
即ち其二代の將軍秀忠公上洛を致す恐れおがら龍顔を拜し奉
まつると云ふ事の近附きましたが大きにどうも百官の人之
に就て其式に惱みました と云ふのは東の大宮と一口に申しま

す位徳川二代の將軍秀忠公其姫が恐れながら十善万乘の君の王妃であります其又君が御對顔に相成りまする時に正逆にも秀忠と恐呼捨てになる譯にもならずと云つて大君が勅命に殿樣と云ふことはおかゝ使ふべきことではございませんどうかして其扱ひをと云ふ時に又職權の輕き方々であらざるおとでございますからそなで秀忠公上洛を致しまして御對顔に相成りまして太政天皇の尊號を即ち贈られました太政天皇と申上げ奉まつりまするは是は恐れながら十善万乘の君が即位を御譲り遊ばしたる後に御隱居遊ばしたる方を即ち太政天皇と申上け奉まつります御其隱居なすつてからの御名前のやうに手前は存じて居ります其秀忠公へ對して太政天皇の尊號を贈りにあつて此所で鼻の御扱ひにて御對顔に相成ると云ふが前年より是はあつたやうに見へまするから準備整ひました

るものでございまさから依て寛永三年三月四日に江戸表を出川二代將軍秀忠公御出立に相成りますことで御道中御行列の一條京都の御所に於て御對顔に相成ります一條より此所に一つの騒動出來致しまする一件

第六席

茲で二代將軍秀忠公には總隊の人數一万五千人、其御先供を仰せ附られたるは奥州宮城郡青葉山五十四郡の旗頭蝦夷の監察北狄の抑、伊達權中納言政宗公其外土井大炊頭、本多美濃守、酒井讃岐守始めといたし恩顧の大名何れも之れに從ひましたる事にして道中の賑やかと云ふものゝ又別段でおざいます尤も宿々の掃除萬端充分に届いて居ります三月四日には江戸表をお立ちにあり同月十五日に京都へ御着にありました御出迎ひ萬端充分の事にいたしまして兼ねて申し上けます通り東本願寺

が旅館と云ふ事にありました右御旅館へ三日の間御休息あるなりまして四日目が彌よ〳〵御對顔に相成ります京洛中の評判は大したものにて江戸將軍樣がお出でにおつたと云ふて樣々の噂さをいたしましたけれども江戸表と違ひ自態人氣の靜かお處でございまして當日は路次殿重に警護をいたしまして所司代始め京都西本願寺に於ても充分に手配をいたしました江戸表の町、奉行は南北でございますが京都大坂は東西でございます其時西の町奉行が坪内伊勢守東町奉行は本多信濃守の兩町奉行共に充分に手配をいたしました御對顔にあります場所は京都二條城に定められました員御の方から御參内をして御對面をするのは甚だ順道ではないと云つて本願寺の御旅館へ對して十善万乘の君が幸行あらせらると云ふ法はありませんから其所で二條の御城へ何方からもお立出でになる事にあり

ました十善の君に於ては日の御門より御行あらせられましたのでこは二條のお城へお越しに相成る、又た將軍の方は東本願寺より二條へ立出よなる當日に於ては其辻々町々に於て嚴重に人數を配ばります此時に堺筋を固めて居りましたのが前申し上げました伊達政宗と云ふ人の同勢尤も此度はお先供仰せ付けられました事ゆゑ家臣等に於ても何れも片倉備中、同じく小十郎、伊達安藝、伊達上野、伊達彈正、天堂備後、間庭惣太などゝ申ますは就れも仙台の重臣でございまして之等へ丁寧に仰せ付られました、さうでもなく其風聲にならせられまする御幸の途中に於て自分の預ります場所に狼藉でもありますれば之は容易あらんとでありまするから當日に於ては家來へ對して組の頭より仰せ付けられまして お酒を呑む事はあらん第一大き醜をして話しをしてもいかんと云ふ位あでございます中々其

の見物を許すまんと云ふ事はございませんけれども其の御通
輦に相成まする前は往來を差止めれば人民悉く難儀をいた
しますから今の時間で申しますと一時間とか或は二時間とか
云ふ其前に攝はず往來を差免してありましたものと見に日の
御門を御出門にあらせられますのは丁度四ッ時でおざいます
扨つて其前に於ては伊達の同勢手配をいたして居りますモー
間もなく之れへ鳳輦の來たると云ふ半時ばかり前二人の武士
大醉をいたしまして黒木綿の紋付白縞の袴を穿いて一人は年
齢三十二三大小を帶びて緞緒の草履を穿いて居ります一人は
袴も何もおざいません藺草履を穿いて朱鞘の長い大小を差し
て眞赤になつて二人ヨロ〳〵堺筋へ參つたが竹と雀の仕切
の幕をスーッと張つてありますモー今に往來止めにならうと
云ふ少々前でおざいますから京都の人達は誰一人どうしてさ

いふ處へ通り掛るものはない自態ソノ好く云へは靜かだが
惡く云へば臆病でございますから中々さういふ處へ立廻はり
ません氣の永い處でございましてナ、兎角して居る所へヒョロ
〳〵今參りましたが往來へ立て大きな聲をして謠などを
唄つて居ります樣子ハラ〳〵ッと若侍士が夫へ參つて　侍「エ
ー御武家〳〵之はしたり夫に立つて居るお武家　△「最前から
呼んで居りますのは拙者共の事か　侍「左樣で　△「ハー何の御
用がある　侍「別段に御用と言ふ程の事はございませんがモハヤ日
の御門より御出門に相成ると云ふ時でおざいます往來止めに
も相成りませうから其處に立つてお在でなく何れへかお出で
になるかは知らんが早々お歩きなすつたらどうです　○「夫は
大きにお世話だ立てるも歩くも拙者の自由だ何を入らざる事
を云ふイヤサ何を拙に立つて居て惡いか我々は今日浪人だ浪

人ではあるが好く十善万乘の君皇威の洪大ある事を知らざるやうなものでない已に御出門にならせられ之へ鳳輦が參ゐるものでも居たら不敬にも相成らうし無禮でもあらうけれ前へ立てでもマダ誰も來る樣子もない入らざる處へ來て何か權威を振ひ退けやうといたすのと我々も勝手に茲に立つて居る以上はお通りの濟む間は何時迄も立つて居るんだナ

△「何處の辻へ往かうと往くは武士の恥辱だ」

木嶋鬼「さうだ〳〵小侍士の爲めにサウかと云つて歩いて侍「夫は怪しからん事ゐ見受け申せば餘程御大醉あすつて入らつしやる樣子御酒を帶びて居るから右樣な事を仰せられる我々ども何も徒らにお止め申す次第ではあいモ一間もなく之へお出でにもなる夫へお出でにあつたから何へお匿れあさいと云つた處がトテモ間に逢はんから西の方へお出でなすつたら好からう

△「何處の辻へ往かうと

も大きなお世話だ貴樣達の何も知る處ではないと云ひながら亂暴ある一人裾を寒り上げて其處へ小便でもしさうな樣子だから侍之れ怪しからん出物腫物處を嫌はん何處で出るか知れん御通輦の時に不敬の事があつてはなるまいけれども〻何も差支へないではないか私は病氣だ病氣だから出る時は何所でも出る」此の武士等い何者なるかと云ふに之は九州浪人で一人は木嶋右源太と云ひ一人は富田兵十郎と申しますもの俗に云ふ「人厭がらせ」で何でも節を付けて幾何か酒にでもしやうと云ふ性質と見にる若侍士拾て置かれるいから此上に脱力ふ訴たへても何れへか連れて往かうと騒いで居る處へ出て參つたのゝ年齢まだ漸々二十二三にもありませうか頭の樣子を見ると青々とした髭剃斗目麻上下を着用して涙緒の草履を穿いて高膀たちを取つて夫へヅカ〳〵と參つ

たのは之は伊達の家来常日其辻を固められる事を仰せられました井谷四郎右衛門と申します人　井「如何いたした　侍「組頭へ申ます」斯様〳〵しか〳〵の譯でありますと　井「左様か夫は其方どもが何か申し分が悪ぬから此の御兩名が尚更ら頑として動かんのだコレ御浪士〳〵　△「何だ浪士とは何だイヤサ拙者が浪人をして居る事をどうして貴様知つて居る何で拙者が浪人をして居る事を知つて居る失敬千万武士を捕へて突然浪士とは何んだ　井「尊公只今九州浪人しか〳〵と云はれたからで一名前が知れないから浪士と云ふの外へあるまい夫れに別段差支へはあるまい　木「何を云ふ　富「何だ生若輩の身を以つて何の應對に之へ參つた　井「イヤ只今向ふのものが云はれた通りモハヤ御通輩も聞もでさいませんから却つて此の處に居て御迷惑があつて宜しくないから此處は差支へに相成り申して

を退散なさい別段に何も御迷惑あつて止めるの或はどうするのと云ふではないし大層酒氣を帶びてお出でなさる様だが酒は狂水で氣違ひ水と申す位ぬ　木「何だ氣違水だと之へ面白い我々とも如何にも酒氣を帶びて居る酒氣を帶びて居るけれども決して亂暴を働らきますのではない筈は仙臺の同勢が當堺筋を固めて居ると云ふ事を承知して參つて伊達權中納言へ面會をいたしたい政宗と云ふ御人に面會をして少々頼みたい事があるに依つて參つた　井「イヤ主人は今日供奉仰せ付けられ此場に居つて尊公等と面會をして居る事は相成らんから何に用かは知らんが此處に於て述べて見さつしやい　富「伊達政宗と云ふ人は供奉仰せ付けられたから此場に至つて我々に應對をする事が出來ない然らば血の通ふ少しく物の判るものを一人出せ　井「血の通ふ少しく物の判るものを出せとは無禮なる御一

言伊達政宗の家來には血の通はんものは一人もない先刻から事を穏かにいたさうと心得て居れば追々に高に相成つて悪言を吐つしやる　木「怒つたお野郎何が眼が立つ夫れしきある事が分つて突然りに我々に對して無禮の一言貴様に話すまいと思つたが頼みてい事は仕方がない我々浪人の情けない事には伊幸さるゝ所の其の鳳輦をヨワながら拝し奉まつらうと心得てもさて夫れて許されませんやうの仙臺の同勢へ拙者を加へて鳳輦の淀御ならせらるゝ所を拝さうと云ふのだ我國の王たるものを拝すと云ふのは即ち愛國心だ　井「夫は相成らん家來ですらも中々鳳輦淀御の折りから夫を拝し奉まつる事を許さん位め當日掛りの者の外は雷堺筋にい居る事も叶はん位わツンナ下ら。あい事を申して居る場合ではないから　木「下らん事とは何だ兎角する内に仙臺の家來若武士五人出で八人出で

來りまして　△「何だアンナ事を云つてる年が往うんから眞當に扱うみとが出來あいから……　○「掴み出してしまへ事に依つたら切り捨てゝしまつても大事ないと若侍士追々に殺氣を含んで居ります、さうかうする内にへイホー〳〵と云ふ聲でございます最早御先供と見にまして其所に御越しよ相成りましたのは九條殿と見にまして遙か向ふの所へ御車の見にます様子兎角しまする中にドッ〳〵〳〵と先觸れが夫へ參つた　△「お目觸のあいやうに〳〵〳〵と云つて之れへ布令て參ります　井「御浪る様子井卷四郎右衛門も仕方がないから夫へ參つて士是れまでの間は登公と併論をいたさうと心得たがモハヤ論をいたして居る暇はあい退散せんに於ては我々に於て引立つて參るから左様必得ろ　富「引立つて往くから引立つて見よ云はして置けば不禮千万浪人しても九州武士だ我々の腕前を見

せて遣はす」と亂暴にも富田兵十郎刀の柄に手を掛けてヒラッ夫を拔いて斬つて掛ると四郎右衛門眞二ッにあつたかと思ふと体を開いて強く腕を握んでドッと夫へ投げ出し起き上らうとする所を早くも脾腹の邊を蹴りました」片邊に扣へて居りました木嶋右源太が己れ朋友の敵きと云ひながら刀を拔かんとするを手許へ附入り其手を握んでズデンドウと投げるが否や疾風電火の當身に二名共其所へ倒れると手早くも夫へ取り落したる浪人の一刀を鞘に收め氣絶の二人を突然ふ帶革の所を押へ兩手に吊してドッと馳けて參りましたる其時の働き實に若侍の樣ではありませんどうして二十や二十一のものがさういふ働きの出來るものではない突然に掴んで幕の外へドッと兩人を投げてしまつたさうかうする間に此所ふ九條殿最早御車を乱らしてお出でになりましたが早くも向ふ眞劍の光り

が見にはして白刃の光りを見るとお驚き遊ばしたものと見にアレは何だ何物ぞ」と仰せられて併し御車の内に於て御尋ねに相成る内に一人の若侍が難あく夫を片附けました九條殿繁と之をお認めに相成りさうかうする間にドッ〳〵と御乘出しに相成つた井卷四郎右衛門其儘にいたして片側の所に出で迎へ御通輦を拜し奉まつる其所で二條の城へ對して十善万乘の御門滯はりあく御對顔に相成り其儘還御にありました然る所が此の一問題が起りましたのは其鳳輦の今向ふへ見にやうと云ふ時お眞刀を拔いた二人のものゝ處分如何いたしたら好からうと云ふ時其の砌り仙台の家來枝備人と云はれましたる片倉備中引受けて此一條を附けまする一件から九條殿喜悦の餘り斯々の恩賞を給はりまする一條井卷四郎右衛門の發に出世をいたしまする一件でございます

第七席

仙臺の家來井巻四郎右衛門が取押へました木島源太富田平十郎の兩人は後に京都町奉行へ引渡しにありましたが併し酒狂人の事ゆへ別段に子細もない京都追放に相成りました此者は九州の寺澤の浪人と申ます事でございます此事に就いて外のお物語はございませんが然る所又々堺筋が俄かに騒がしく相成りました一番發が劇しき所であります所へ再びの騒ぎであります所へ再びの騒ぎであります高一の事あつては一大事と之へ乘込み來たるとソモ此者は越前宰相忠直公の家來にして鄕久右衛門と申ふものでございます今日越前家に附いて金州通りの警護をして居りました所早朝より酒を飲んで居たものと見に四ッ少々前におつて乘出し雜沓をする樣子を見て酒の醉が發したものと見に一刀を拔いて亂暴に

及びました夫れッと云ふと仙台の家來は之を食止めましたが實に容易あらざる騒ぎになりました此時に仙台の家來片倉備中と云ふ人は鉄砲組へ下知をして殘らず切火繩へ火を移せと云ふ事を命じました中にハ之を宜しからずと申すものもありましたが片倉に於ては之を聞かず遂に切火繩へ火を移させましたさうゐふする間に仙台の同勢にて其の酒狂人は捕抑へにあり跡で越前家へ照介をすると越前家にては鄕久右衛門と云ふものはない大方當家の名前を騙りしものと云ふ事を答へましたに就て直ぐ久右衛門と云ふ人は切腹を仰せ付られました大名族本にても斯い家來が何か立派な事をした時には當家の家來に相違ないと答へ惡い家來が失策をした時には當家には左樣な家來はないと云ふから其のものは家名を僞はりたるに依り切腹又たは所拂ひ等に相成るのが例でございました扨此

の時に京都所司代の板倉伊賀守より右の次第を近衛關白殿へ申上げました其時に大層近衛殿片倉が切火縄へ火を移しました事を感心遊ばされ禁裏を守護する大役あれば萬一亂暴浪藉等のものゝ之れ有る時は之を討取も仔細あし流石仙台の政宗は充分の注意をいたしたると見える」と大層お譽めに相成りましたされればにや二百六十餘大名次第に參勤交代をする時に切火縄鉄砲と云ふは仙台に限りましたゝ之は其の砲り仙台に渡面あなりました事でございます御當家ばかりは江戸表へ這入りまする時に品川迄は切火縄を附けて品川へ這入つてから消したものであります能く明暦の大火の時に切火縄を御免にあつたと云ふものもございますが中々さういふ譯でもございませんと全く二代將軍御上洛を遊ばした時にお免しになつたのでおざります扨て二代將軍秀忠公に於ては太上天皇の假宮にて御謁見の儀滞ふりなく相済みまして本願寺へお引取りになり御休息にあつて翌日嵐山の櫻を御賞賞遊ばされ夫れより直ぐに江戸表にお歸へりになりました賊にどうも京都に落ちたる金銀は容易ならん事でございます尤も關東から役人が參つても大分金が京都へ落ちると云ふ事は能く申します況して將軍家が御參内にあつたる時は何位の金銀が京都の町へ落ちたか知れません先づ二代公は目出度くお歸へりになりましたが竹千代丸樣弼よ〳〵西丸入り仰せ付けられました西丸お乘込にあればモー將軍家になつたも同樣間もなく將軍宣下と云ふ事にありました二代の將軍は茲に御隠居をお遂げ遊ばせられ竹千代丸樣三代を續いて家光公樣と申し上げ奉まつる之れより三代に移りまして講演をいたします代々の將軍家の中にも一番の名前の高いのは三代の家光八代の吉宗の此御兩名が一番御若

勞が澤山ありましたもれと見へまして之は其筈で御時代の變目と云ふ樣お事で動くともあれば徳川の家を覆がへさんとするものがありました夫の爲めに隨分お骨が折れました樣に存じますけれども家光公と云ふお方は御勇氣活達の上に能萬事にお心を注けて政事をお執り遊ばされましたから誠にどうも天下い太平に歸しまして大よ一同の者喜ひました茲に寛永の十年までは別段お話もございません寛永の十五年正月二十七日の事でございました同二十三四日の頃よりして御殿山に時あらぬ櫻が大層開きました尤も彼岸櫻は早いものでございますから一月の頃に開くと云ふは珍らしい然るに幼分か暖氣でもありましたが御殿山の櫻が大分開きましたので見物が大居出ます此事が早くも上樣のお耳に這入りましたものだから正月二十七日の日に御殿山に櫻を御見物を仰せいだされました尤

もお忍びでおざいます將軍家が御殿山へおると云ふ事にあれば人民が大に難儀をすると云ふ事を察し漸々家來に於ても四五十名をお連れ遊ばす尤も三代の上樣は何處へお出でなるにも多くは馬に乘つてお出で遊ばしたと云ふ事でさう多人數をお連れにならない通る間店を閉すと云ふ樣お事で濟みました元より今日はお忍びの事故に御殿山へお出にありますして往來を止めるやうな事はありませんけれども自然に將軍家のお出でと云ふ事は分るものと見にて往來の人も謹んで拜する樣な譯家光公に於ては酒井讃岐守、青山大藏太輔、松平伊豆守を始めとして旗下衆御供なひ御殿山へ成せられ好き所へ將几をお据ゑ遊ばして花を御覽ぜられ御持參になつた御要意の御酒肴を取出して其の所で召し上りあがら花を眺めて居らせらるゝ時ふお幕外に控へて居りまする旗本衆に於ては我孫子新十郎

池田勘兵衛、金松又四郎白旗三左衛門、水野十郎左衛門、近藤登の介等を始めとし其頭をい旗本の勢いが強いものでおざいますから就れも意氣揚々として夫に控へ酒を飲んで居りました然るに此の白旗三右衛門は至つて殊樣な事が好きだから　白「各々どうも今日の花見は別段で併しどうも正月二十七日に櫻が殘らず開くと云ふは實に珍らしき事である　大「さうさ何れも此の御殿山の櫻は早いが之れは南方にある故に幾分か暖かいと見ゐて早いと見ゐる併し何も當年のは早過ぎる　近「先づ此の櫻の花では一番何所が好からうな　○「夫はどうも吉野に越を所は無からうと思ふ實にどうも吉野の櫻と云ふは充分に見れば花に醉ふと云ふ位のもので拙者は吉野が一番だと思ふ　○「ハー某しは吉野から見ると嵐山だナ夫は櫻は飛む〳〵にあつて居るが前に川を控へ船などが流れて來る所などを見ると

實にどうも繪に画いた樣で櫻は嵐山の方が餘程好と思ふ　◉「イヤ拙者は金閣寺の方が好からうと思ふと云ふ者もあれば我は江戸の向島が好いと云ふものもあり上野が一番だと云ふもあり樣々に意見が違ひますスルと一人最前から默つて聞て居りました太田喜太夫　喜「イヤどうも各々は好かんナ只今我孫子殿が問題をたしたのは櫻は何處が好いと斯う云つたんだらう花の好い處は何處であらうと云ふので夫を各々はヤレ吉野が好いのヤレ嵐山の向島の上野のと云ふは夫れは花よりも景色を云ふのだ景と花とい進う花と云へば花で答へおければ好かない　○「太田左樣にお手前が理屈ばつて申すが然らば花は何處がよいらう　太「各々はどうも御存じないかナ當品川宿經王山本光寺の梶原櫻を御存じおいか　○「ヘイ經王山本行寺の梶原櫻……　太「是は怪しからん御殿山の櫻を御存じあつて本光

寺の櫻を御存じないと云ふはどういふ譯だ梶原櫻が先づ第一の名木だな本堂の前あ只た一本あるのだが其の花瓣が三寸五分四寸位ゐあるあ　○ソーレ始まつた〳〵　大方始たら櫻の花瓣が三寸五分四寸のとある譯けがない苟藥か牡丹と間違つたのであらう太田さうだらう牡丹芍藥と見違つて來たか　本夫れだから好うん當御殿山の櫻も咲いて居る位ゐであるから經王寺の櫻も咲いて居る拙者も現に一昨日罷り越して梶原櫻を見て來た嘘と思し召すあら尊公等歸路本光寺へ立寄つて見給へ花瓣が少さかつたら斯く申す太田喜太夫各々に詫びる以來何も申さん　○「イヤして見ると全く花瓣が三寸五分四寸あると申すあ」と段々其物語が高聲になつたから上樣のお耳に通入りました　家「善太夫〳〵」　善「ハッ」　家「其方は面白い物語りを致して居るな　善「恐れ入ります只今申して居りました事が

耳に達しましたるか善太夫一言の申し譯がございません　家「イヤ詫るに及ばん今其方の物語りに經王山本行寺の櫻は大層大輪であるとの事　善「左樣でございます花瓣の大きさが三寸五分四寸もあるやうに見受ます　家「夫は珍らしい然らば歸路本行寺へ立寄て梶原櫻と云ふのを見るであらうと仰せ出されました御家來方委細畏まりましたと云ふ內にお側の者が早速先方へ沙汰を致して置なければありませんから直に御小人目附黑川藤十郎御小納戸近藤貫一郎の兩名本光寺へ參り　黑「頼む〳〵」早速其所へ番僧が見へて出でました見ると立派な武士でございますから　僧「ヘエッ　黑「住職は居られるか　僧「左樣でムいます三、月以前より不快でございまして引籠つて居ります　黑「ハヽア三月以前より不快何と申す　僧「日蹇僧都と申します　黑「ハヽア拙者は御小人目附黑川藤十郎是あるは近藤

貫一郎と云ふ者將軍家今日御忍ひで御殿山早咲の櫻を御見物おされました尚當寺にある梶原櫻と云物悉とく花辨の大きいと云ふ處から上様御立寄りに相成るが差支はあるまいか　僧「左様でございます少々御控へ下さるやうに病中でおざいますが師に尋ねまして御答返致しますと奥へ通入る二人の夫に待て居る内に本堂東手の方を見ると成程花辨の大きい正逆四寸もございませんが尋常の櫻から見ると大輪でございます　近「是は不思議だ御覽に入れたら定めし上に於ても御滿足に思召すだらうと申して居ります内に番僧は夫へ出張りまして　僧「エヽ僧都のお答へにも大切ある御方斯様なる貧寺へお出でになるは當寺の面目にも相成る事ゆえ充分の手當仕まつり度候得共病中と申し俄かの事でございますから其儘にて差支へおくばお成りの程を願ひます　との事　墨「アヽ若しうない上様は

美麗な物を飾り附るとは大お嫌ひであるから寧そ此儘にして只掃除万端をして置たから宜しからう　僧「掃除は勿論是より早々仕まつります　墨「夫では其用意を致すやうにと兩人立歸り右の次第を松平伊豆守へ申し上げました伊豆殿に於ては上様へ對し申し上げたから御殿山早咲の櫻御見物の歸路本行寺へお立寄りに相成りました「所が俄かに掃除を致した位ゐ何も用意も整のいません是は突然の事ゆえ尤ともの事で日慶僧都に於ては大病でございましてお出迎ひさへ出來ぬ位ゐ故座敷を移して引下つて居ります左右する所へ上様お乘掛でございまして能き所へ敷物の御用意をなされ御覽にあると成程噂さに違はず梶原櫻と云ふのは今を盛りと咲亂れて居ります今迄御覽にあつた櫻の内にも斯様な輪の大きいのを見た事がないと云つて大尉御意に適いました然るに是に於て暫らく御

休息一同の者に於ても休息を致して居ります所へお茶の用意をして持参致しました次の席に十四五名も揃つて居りますお旗本の所へ十三四の小坊主お茶を持て出でまして「坊「各々様方お茶を召上がりませ」と申したのは日乗と云ふ小坊主であります並んで居る内に黒川藤十郎と云ふ前申しました小人目附此人は役目だから今日使ひにも参りましたやうなもの丶浮土宗の難固まりで日乗が夫へお茶を出すと　黒「呑まない〳〵抽者は日蓮宗の腥ぐさ坊主が出す茶などを呑むと腹が穢れる其方へ行へ」日乗是を聞てクス〳〵笑ひ出した　日「貴所さう仰しやるものではございません茶角是に持過に持参をしたお茶でございますから召上がりませ　黒「呑まん〳〵　日「夫でも一ッ召上りませ　黒「呑まんと云ふのに此小僧五月蠅奴だ忌だから呑ん彼方へ行〳〵　日「左様でございますか　黒「ア丶ユレ〳〵

小坊主彼の本堂の正面に壇がある　日「左様で　黒「彼の壇の上に襟巻をして座つて居る坊主が居るる何だへ左りの手に海苔鮹のやうな物を持つて居るる　日「そんな物はございません　黒「夫でも彼に居るではないか襟巻をして海苔鮹を握つて居る坊主が　日「貴所方も大小を差して居るお方であるからお尋ねあさりやうもあるものを襟巻をして海苔鮹を持て居るとは餘まり分らんお人だ彼とそ即ち高祖日蓮大菩薩でございます　黒「ウム彼が日蓮と云ふ坊主の木像か詰らん物だな何か聞ば日蓮と云ふ坊主は安房國小湊とか云ふ所の生れで漁師の悴ださうだな詰らん物を飾つて置くものだ」日乗暫らくの間藤十郎の顔を見て居りましたが　日「甚はだ失禮おかち百姓町人なら捨置ますが貴所は大小を差して居る身分として左様ある悪口をお吐あさると云ふは怪しからん事で全体此武士の大小は誰が

許したと思召すイヤサ各々の差して居ります大小は誰が許した物でございますか日蓮上人から許されて大小を差して居る身分であるから其高祖を悪口するは如何にも其意を得ざる事　黒「ナニ此小坊主生意氣な事を申す日蓮上人が大小を許して戎々が腰ゐ帶て居ると何で左様な事を申す日蓮上人が武士に大小を許したと云ふ事は夢にも見た事はおし話しにも聞た事はおい日蓮が何で大小を許した其事を申せ申し分に依れば捨置んから左様心得ろ　日「御存じあいならば申し上げませうと小坊主との問答が自然に聲が高くあつたから次に並んで居た人々も顔を見合せてどうも武家に大小を日蓮が許したと云ふは珍らしい事だ何を小坊主が云ひ出すかと思つて聞て居りますと當年十四歳になる日乘慢かる事なく此場に於て物語りを致すと云ふ一席

第八席

扨次ぎの間に居りましたる人々に於ても耳を傾けて居りましたが上様も聊さかお聞取にありました藤十郎は眞赤になつて藤「サ日乘武家に對して日蓮が免したと云ふ其の謂れがあるならば申せ汝が誤解をして居るならば某し好く話して聞せる日「イヤ貴郎から別段に承まるまでの事もございません貴郎てそ大小を差して誰に免されたと云ふ事を御存じでないと云ふは實に恥づべき事であります　藤「生意氣の小僧だぞういふ譯たと其場に於て申せ　日「されをお話いたしませう」と是から席を進んだ日乘が　日「斯様申すは如何ではありますが古へ平家の爲めに一度將權を握られたる所、頗朝公起つて天下を掌握あり夫より暫らくの世盛りでありました然るに北條六代相摸守時宗の時に至つて蒙古の船團々日本へ渡り悉とく我國を勁や

かさんといたすを其來れるものゝ大將を捕へ首を打つて歸へし又來るとは首を打つて歸へし其事三度に及ぶ三度目に至つて衆古に於ては戰さを以て事をおさんとの心底あて軍勢多く我國へ差向けんとせし時日蓮上人早くも此の事を察し「安國論」を捧け奉まつる其「安國論」に依つて始めて執權時宗衆古の船の來たるとを知り給ひしが案の如く間もなく大軍押寄せ來たる此時衆古を討たんが爲めに月の曼陀羅、日の曼陀羅を作り日蓮自ら筆を執つて南無妙法蓮華經の文字を認め尙は又自ら異敵を亡ぼす事を神佛に祈りたる事にして乃ち蒙古の船に於ては神風の爲めに悉く覆へり生きて歸へるもの僅かに三人是れ乃ち日蓮高祖が「安國論」を差上げたればこそ充分要意もなし衆古の艦艦を防ぎ得たるものにして夫れより武士の權益々強くありたるは是れ安國論に依つてなりさすれば日蓮の爲め

に武士とも大小を差すを日蓮が免したりと云ふも憚かる處なく左樣な事を知らずして徒らに日蓮の木像に對し罵詈謗を するは更らに其意を得ざる事である」と小坊主の樣ではございません沼々と辨じました流石の黑川藤十郎も一言の答へもなく頭を擡いて下かると御小納戸の安藤勘一郎と云ふもの此人も淨土宗の熱信まり　安「黑川君を給へ私が打破つてやらうコレ〳〵小坊主何と云ふ名前た　日「私しは日乘と申します　安「ウヽ最前から朋友を相手に論ずる處また辨ずる處も水の流るしが如く實にどうも感心だ感心だが其位お出來るあれば尙は更らお尋ねあければあらない拙者が申す事を一々答へる事が出來るなら答へろ　日「左樣でございます私の存じて居るだけの事は何でも答へます然し私は僅か十四歳の小坊主でおざいますから八十貫百貫のものを擔げと云つても擔げません佛法は

佛法の道を以て來れば大低の事をお答へはいたします　安「此の小坊主生意氣な事を云ふ奴だ全体尋ねるが釋迦と云ふものは何だ　日「へイ　安「イヤア釋尊は何だ」と云つて尋ねた　日「夫れは申すまでもなく中天竺の摩陀羅國淨飯王の太子悉達太子にして稚さい頃より無常是空を感じ世を捨て王位を捨て多年辛苦を積んで遂に釋迦如來かあり給ひたる事は何方も御存知の事でありますが　客「ウン法華經の大妙典といふはどういふ譯だ　日「貴郎もどうも只今お聞きなすつたお方と同樣でございますが　安「何だ……と法華經に大乘妙典と云いふゐとがあるがどういふ譯だ　日「其釋尊が出家して色々の佛法を積んだ後に法華經に至つて成佛脫得の大目的を達したる故に法華經を指して大乘の妙典と申すではございませんか　安「成程阿含華嚴方等般若夫れから法華經に至つて始めて成佛脫得の眞妙に

達して之れを大乘妙典と云ふのか　日「左樣でございます　安「ウン全体貴樣は兩親が在つたか　日「安藤さん詰まらん事を聞いちゃ好けません兩親がおつて子供が出來たんじやありませんか　安「夫れだから聞くのだ兩親は達者で居るか　日「へイ達者で居ます　安「兄弟はあるか　日「姉が一人兄が二人あります私しは末でございまして出家をなげました　安「成程姉が一人兄が一人ある兄弟二人上にあつて其方は一番末だサー我々どもと問答をして勝たらと思つてる駄目だ其方に兩親もあり兄姉もある阿含華嚴は兩親方等槃若は兄姉其方は法華經だ極末だ阿含華嚴方等槃若があればこそ法華經と云ふものが夫れに形造つたのだ　日「安藤さん貴郎中々〳〵喋舌るのが上手だ夫れは感心だ感心だが安藤さんはお屋敷がありますか夫れとも無宿か　安「無宿とは何だ某しは牛

込に屋敷がある　日「ヘイ牛込にありますか貴郎のお屋敷が地面で頂戴をいたしましたかお屋敷のまゝでございますか　安「地面を拜領して夫れから拵らへた　日「ヘイ大層な物置でございましたらう　安「餘計お事を申すな　日「屋敷を造るに先づどういふ事をおさいました　安「分からんういふ事を第一番にどういふ事をおさいました　安「分からん小僧だな地面を拜領して彌よ〳〵屋敷を造くると云ふ時に地形をして外圍をして夫れから家を建つて雜作をして順々お固ためた　日「ヘイ其の家には大國柱らと云ふことがございませう　安「あるチヤンと家を抑さへて居る柱らを大國柱らと云つてな　日「其の大國柱らを一番先きへ建てますか跡で建てます　安「夫れだから今申す通り地形をして夫れから圍ひをしてから　日「夫れ其處を考へて御覽あさい貴郎が仰つしやる地形家を造くつて之れを建てるときに大國柱らと云うものを据へる

をしたり外圍ゐをするか阿含華嚴悉皆下組をするのが方等般若彌よ〳〵大國柱を建てる時には即ち大乘の妙典其邊から能くお考へなさいと申しますするが中々面白い一同感心をして居りまする其中に當日運れ走に此の御殿山へ櫻見にお出で遊ばしたのは東海寺の澤庵と芝增上寺の意傳和尚、處が上樣は梶原櫻を見物なさると云ふので經王山本光寺へお出でにおつたと云ふを聞て兩僧共お其處へ參りまして次ぎの間で聞て居りましたが安藤勘一郎が小僧の爲めに說込まれて赤面をした樣子に意傳は着て居りました袈裟衣を脫いでしまひ茶坊主の文齋と云ふものが着て居た衣類を借り受け俄かに仕托をするから澤庵禪師は　澤「意傳何をおさる　意「イヤ餘り面白い小僧だから彼の小僧と問答をしやうと思ふ　澤「イヤ年甲斐もない止しあさい　意「さうでない慰さみだ中々面白いと意傳和尚止せ

ば好いのに茶坊主の姿にあつて夫へ出て來て　意「小僧〳〵最前から聞いて居たが中々ごうも感心だサー私も少し聞きたい事があると夫へ出ると日乘振返つて意傳の顔を見たか　日「破壞墮落の生臭坊主其方と一言も交へる事は相成らん　意「ナニ何が破戒墮落だ如何に年が往かんうちと云つて某しは今日お供の中に加はつた茶道坊主を捉らへて破戒墮落をしたと云ふはなんだ　日「破戒墮落と申す事を申して聞かせん其許は芝三緣山增上寺の意傳大僧正に相違あるまいナゼ意傳大僧正あれば意傳僧正の姿を以つて之へ參らん左ずれは其方の尋ねる事を答もなす然るに茶坊主の姿に僞はり形を變し來りしは是れ妄語戒と云つて五戒の一ッされば破戒墮落の坊主と云ふサー之に申し分があれば承知いたしたいと意傳大僧正に向つて大喝一聲叫びました、流石の意傳大僧正もアッと赤面

をあしたり時に日乘之れさりにて置けば好いに　日「アー淨土宗の頭に立つ處の意傳僧すら斯の如き破戒墮落の僧なれば其他に至つては云ふまでもなしされば淨土宗は最早地に墮ちたりとカラ〳〵と笑つた其時に至つて僧正も赤面をいたして暫らく頭を下げ何とも云ひ樣がない松平伊豆守此の樣子を聞き之は一大事と心得ましたから、直ぐに還御と云ふことを布令した忽ち一同のもの此のところを退散いたしました意傳增正に於ても悉とく赤面をして此の本光寺を退參をいたし直ぐふ增上寺へ立ち歸へりましたが此のみと忽ち他に聞へましたるから淨土宗の末寺一山一寺の住職に於ても夫れ〳〵增上寺に詰め掛け經王山本光寺に於て意傳僧正が小坊主の爲めに赤面をしたとあつては一門の外聞なるみと京都本山に聞にては容易ならざることあれば此まゝに捨て置くことは相成らん」と

躍起と成つて此の恥辱を雪がんことを協議いたす、意傳に於ても我れ一時の戯むれより淨土宗一体の体面を汚がす樣なことになつては面目ないと茲に日蓮宗に德あるか淨土宗に德あるか改めて問答をいたさんと忽ち願書を作りましたるにして寺社奉行瀧川伊勢守殿手許へ對して宗門の寺社奉行瀧川伊勢守御老中松平伊豆守へ御相談になると伊豆守に於ても伊「昔しより宗門の爲めに大に國を亂せし例あれば之を許るし何方が負けても一方の宗徒が之に服せず事を起す樣な事があつては相成らんから之は免さん方が好いと云ふので願書は下戻しになりました然れども然れ共伊傳よりいたして屢々願ひを立てますに依つて評議の上改めて之を免しまする茲に有名なる品川問答に及ぶ……

第七席

抑も此の芝の三緣山增上寺はおかゝ由來のございます寺で天正十八年八月八朔お樓現傳未だ德川三河守家康と仰せられ堂々たる御身分になられて江戸表へ御入國に相成りましたる者でございまして廿八日八朔の日が丁度江戸へ遣入ります日で御馬上でございまして既に只今申上げました芝の大門邊りではございませうか丁度ほいは一圓の並木であつたさうで老若男女何れも江戸表へ初めて御入でに相成る德川家康公と云ふ御方はどう云ふお方であらうかと言ふので名々之を見物致して居ります御馬上あがら德川家康公御覽になりますと此中に一人の出家身裝りも甚だ惡うございまして頗りに國を厚ふ致して居りますのを御馬上で御目が若きまして御側に控へて居りました白石七之助を御呼び遊ばし　家「彼の僧は如何なる者であるか相尋ねるやう致せ　七「委細畏まり奉つりまし

た」七之助其側へ參りまして　七「出家〳〵　出「ハイ　七「只今御馬上にて御主人御目に留り姓名を尋ねへとのおと何と言はつしやる　出「手前事は存應と申します者でございます　七「ハア存應何れに在なさる　存「ハイ増上寺稱名院の住持でございます」七之助は其儘引返しまして　七「芝増上寺稱名院住持存應和尚と申します者　家「ハア左樣か」ヒラリッと馬から御下り遊ばす家來一同何れ御出でかと思ひますと出家の側へツカ〳〵御自身に御進み遊ばし　家「如何に貴僧聊か眼に覺えあるが其許は三州大慈寺の威應の弟子ではあらざるか」此時に至り出家は頭を下げまして　存「イヤ是はどうも御眼早やに恐れ入りましたること如何にも手前は大慈寺の威應和尚の徒弟でございまして先頃より武藏國へ罷越し増上寺稱名院の住持と相成り居りましたる所此度は愈々關東御一手に御新取り仍相成り尚江戸表へ御住居遊ばさせまするの御樣子尚今日江戸入りを承はりまして餘所ながら此所へ御出迎ひ申上げ奉まつります　家「ハヽア左樣であつたか、其方の師威應とは又別段の間がら予が菩提所は即ち大慈寺あり縁があれば暫時休息を致す案内を致せ　存「エヽ、夫れはハヤ恐れ入りました貧寺に致たしてなか〳〵大君の御入りに相成りまする處ではございませんあれど折角の御言葉御案内を致しませうから」と存應と云ふ御出家が先きへ立ちまして道程彼是れ二丁ばかり參りまするとイヤどうも軒も傾むいて居ります大門ふぞは壞れて居ると云ふ餘程の古寺でございます夫れへ御成り遊ばし竹樣の所へ腰を掛て居ります中に御茶の支度を致してそれへ持參を致し　存「扨やうも何か御入國に就きまして野僧も御祝ひ申上げたく存じましたが何分にも御祝ひ申上げると云ふことには相成りません

位な貧寺でございます甚だ恐れ入りましたことでございますが手前が餅を唯今差上げますぞうぞ召上り下し置れるやう家「ヲヽ左様か夫は何より辱じけない」存應和尚自身にありましたる餅へ黄粉を付けて阿部川にして之れを差上げました昔しの御馳走と云ふは無雑作あものでございます未だ其頃はいに徳川様も堂々たる御身分でわあいけれとも關八州を領して御在で遊はす國の領主でございまして其御人に阿部川餅を拵へて差上げた又上に於ても此上なく御悦ひ遊ばして例の阿部川を召上りました其の儘御別れ遊ばして又た参ると仰せられてそれからと云ふものは日毎に是れへ御越しに相ひ成りましたが徐程氣の合ひました者と見へて此の存應和尚と御交際が深くなりましたが當武蔵國へ罷越て江戸表には菩提院がない幸其提所があるが

三州大慈寺に縁故あることゆゑ當増上寺を菩提院と致したいと仰せられました存應も大きに悦こんで此御約束を致しました左れば三縁山増上寺は徳川家に取りますとなか〳〵力があります寺でございますそれより致して江戸表に於ては之は浄土宗の本山の格を以て居ります位な寺でございます唯今申上げます此意傳僧正と云ふ御人に於きましてもなか〳〵どうして道徳堅固の御人でございましたけれともモウ行掛りで是非に及びません前回申上げましたる通り宗論を致したいどうぞ日慶僧都を對手に一つ日宗に力があるか浄土寺に力があるか改めて是を其問答をしたいとのことを申出ました然る處が瀧川伊勢守より御老中松平伊豆守へ對して申上げる伊豆守信綱と云ふ人は智恵の文殊と言はれた御人であります其伊豆守であるけれども是れは漫りに許す譯に相成りませんと

言ふのい昔しよりして宗論から事の起りますことが澤山ございます淨土宗が勝てば全國日蓮宗の者一体に之を恨み日蓮宗が勝てば其通りでありますからどうも宗論をとせると云ふは穏かではない穏かではないけれども又言はれあく宗論はおらんと云ふことを指令する譯にも相成りません依て伊豆守より して將軍家へ申し上げましたから將軍家に於れましても如何致したことかと思召し御老中若年寄りの方々一同それへ御集めに相成りまして評議と云ふふとに相成りまする老中伊豆守改だめて上様へ向ひまして　伊「恐れながら申上げ奉まつります此度芝三緣山增上寺意傳大僧正よりして願ひ出ましたる宗論の儀是は御許しゐ相成りまするものでございますか但し御差止めゐ相成りますものでございますか第一君の思召しを承まはり其上にて年寄共一同評議仕まつります　家「光公默然と

して御在で遊ばす相列んで居ります土井酒井青山はじめとして一同の人々はどうしたものであらうかと思つて居ると上様は御自分も是を許すとか許さんとか言へない　家「年寄共一同の意見はどうだ伊豆守それへ進み出まして　伊「左様吾々共一同の意見と申しまするものは此儀は御許しに相成らざる方が宜しうゐざいますと申すは唯今全國に其宗派の者澤山是れ有りまして唯今江戸表に於て增上寺大僧正意傳經王山本光寺日慶僧都のみの爭そひゐ止まりますれば是は安きことにございまするが其宗門の爭ひ宗論となりますれば其宗旨の者は唯夫れへ目を着て居りますから如何やうなるゐとに相成らうかも知れません永々のことを慮ばかりますれば是は御許しに相成らざる方が御宜しいやう心得ます　家「ウム讃岐はどうだ酒井讃岐守殿も　讃「左様唯今伊豆守が申上げる通り此宗論の儀は

暫らく其日を延します方が御宜しう存じます追て沙汰致すと云ふことに被仰られました……

家「左様かな」所が列んで居りまする人々は誰れも宗論をさしたくないと喧嘩の端緒を開くやうなものでおざいますから何れも相成らん出來ますまいと云ふ人が多うございます片脇へ控へて居ります大久保彦左衛門

伊「彦左衛門〳〵」

彦「ハイ」

伊「貴公はどうだ御意見はどうだ出て口を開き申すべき身分ではないけれども權現様思召しに依て遊席を許され天正三年文珠山に一番乘一番槍を致し大久保平助……

伊「分かつて居る存じて居る」

彦「存じてゐも何でもそれからやらなくつてはやり悪い随分上の御難職の御供に缺けたることもおく御先祖へ對しても勤め二代の將軍へ御奉公して當三代の上様へも相當に御奉公致て居る彦左衛門其方

の意見はどうであるかと云つて御尋ねに相成れば彦左衛門は彦左衛門の意見を述んければならんが先づ此宗論は御差止め相成つて御宜しいか伊豆守胸中にイヤ宜い塩梅だ働めるのい彦左衛門一人かと心得たが彦左衛門御差止めが宜いと云ふ……

上様御聞き遊ばして

家「彦左何か宗論の儀は差止める方が

彦「ヘエ御宜しうおざいます是れ國亂を開きますやうなもの昔へより致して宗派の爭ひ宗論を本と致して國を亂しましたるみとも數々是れ有ります其宗にありまする者は己れの宗門の敗たりとあれば此上もなく之を紹り多くは耶蘇教の如きは己れの命を抛打て事を致す耶蘇教計りでない今日に來るまで随分やうも宗論より致して國を亂し天下に血を流すやうなみとも數々でおざいまする是れ能く人の知る所、然う云ふやうなことに相成りましては不都合かと相心得ます宗論の儀は御無用

に願ひ奉まつります昔へは其一國の爲す所大將が何れも勇氣十分に滿て居りますれば宗論をはじめとして既に血を流す如き大騒動出來を致しても頓と驚きません最早徳川三代に相成りまして何となく勇氣は衰へて居りまするし唯今に相成りまして血を見るやうなことに相成ても愈々どうも御心を寒からしめやうかと心得ます上に御勇氣があれば縱令坊主共が五百や八百、千や二千、五万や八万の同勢が如何やうに騒いだとて上一同に命じて攻ることが出來ますが三代に致して勇氣を脱し唯今に相成て唯徳川三代の將軍と云ふばかりで形ちを以て在する木偶人形も同樣の……

家「默れ彦左衛門木偶人形とは何だ

彦「イヱ上げましたる譯でゝございませんが宗論から事を起し大いに國を乱すと云ふやうな論は相成らんと云ふことを彦左衛門申して置きます上に御勇氣があればそれ

を鎮める位何でもないだが御勇氣が脱して……

家「どうも怪しからん奴だな家光に勇氣があいのらそれが爲めに宗論を恐れ何か坊主共が血を見るやうなことを恐れて之を許さんと申すか苦しうない宗論の儀を申付け」と仰られましたからズツと御立遊ばした伊豆守が是だどうも初めの内は宜い塩梅に宗論は御止しなさいと云ふかと思ふと直に初めるが宜うございませうと云ふ彦左衛門之を聞て

彦「イヤどうも恐れ入ッた宗論を差許すは至極御尤も御勇氣を以て天下を治めあければ相成りません見よ二代の今日、宗論は至極面白うおざいます、坊主共が締りもない頭へ鉢巻をして宗論に敗たからと云つて獲物を持て出合ひます向ふもそれへ應じまして府内に血を流すやうに相成りましたら別段でございませう五千と三千の坊主が戰さでも致しましたら餘程どうも見物でございませう名

々然いた彼なみと計り悦んで居る世の中に差左衛門のやうな人騒がしのものはないと思ひましたけれども仕方がない將軍の御一言として差し許すと云ふことにあひ成りました此處で評議一決致しましたものでございますから改めて社寺奉行瀧川伊勢守より致して經王山本光寺日慶僧都の許へ對して此段御沙汰に相成りました然る所が前回申ました通り日慶と云ふ御方はモウ暫らくの御病氣でおざいまして丸で寢起も一人で出來ない位な御重体、所に右の御沙汰に相成りまして日慶大ひ御驚きに相成つたけれども併しながら是亦宗門一同の外聞になります所、病中でございまして此儀は勤まりませんと言へない御病中ながら日慶早速御受けを致すことに相成りました日を定め此に問答を致します俗に品川問答と申す此件に就て差左衛門骨折りを致します一條

第十席

紅葉山千代田の御所に置まして評議一決を致し宗論をすると許すと云ふ事に相成りました二月十一日の日に瀧川伊勢守自身に本光寺へお出でになりまして日慶に面會を致しました、病中の日慶僧都を以て伊勢守殿へお伺ひを申し上げました處が伊「苦しうない病室にて御面會を致すと云ふ事でございますソコで案内を致しまする日慶はモウ年六十を越て居りますお人無禮を恐でとく謝しまして伊勢守役目の表でおざりますから改めて仰せられたるは　伊「此度三緣山增上寺住職意傳より宗論を致し度の由を願ひ出上お聞届けに相成て此度差許され併し僧都には病中の事で此儀に就て差支へあらば早々に非運りお答へなされて宜しからう」伊勢守には成べくならばこうか宗論をさし度ない病氣を幸はい全快さで待て呉れとでも云ふか

と思ひましたるから伊勢守が懇ごろに仰せられた時に僧郁は是を承たまはりまして　僧「過日は日乘と申しまする小兒より致して事起り恐れながら將軍家に斯樣なる貧寺へ成らせられましたる節病氣の爲めに日慶拜顏だに仕まつらず其砌り年甲斐もなく意傳我が宗を破らんとあしたる時に日乘是を破戒の僧脫落の僧なりと申しましたるを怒り此度宗論を致し度との願ひ仮令今日鬼籍に入る所の日慶なりと雖も我宗論一派の恥辱に も相成りまするから淨土宗の意傳より致して宗論を申し越されたる其の時に病氣を楯として時を延し宗論を致さゞれば即はち我宗旨高祖日蓮大菩薩に對する恐れもあり宗門一派の者に對しても恐れ少なからず仮令宗論の際に此の日慶落命をすると雖も必らず命惜うとも思はれず其の日を相定め宗論の儀は相逃なく仕まつります　伊「其のお答へであれば其の通り上様へ申し上げるであらう就ては上御内命として病中の事ゆえ當寺へ對し意傳僧正を出張事に致す病中の日慶に於ては當寺に當日を相往れて宜しい」是れは御病中でございまするに故さらに先方から申込んだのでおございますから大僧正意傳の方から此經王山へ出張る日慶是を承たまはりまして　僧「エヽヽ御心底有難く存じ奉まつります　又上格別の思召しを以て痛の中の日慶を慰はり當寺へ對し意傳を御遣はしに相成る段、有難く存じ奉まつります當日は病中あがら意傳に面會を致して淨土宗は如何なるとか或いは日宗は如何なるとか尋ねに應じて答へ又た次第に依りますれば野僧より致して意傳に相尋ねる事も有之まするが此の段委細承知奉まつります」誠とに伊勢守感心をして少しも日を延ばして呉れあんおと云ふ事はなくお受けに相成りましたから右の趣むきを承知致して伊勢守に於

ては早々月番御老中松平伊豆守に右の由を申し上げられたものと見へました、扨てお話し別れて次の間に聞て居りました日乘と云ふ小坊主どうも手を打て喜ぶんだ伊勢守殿お聞りに相ありまするとお病間へ參りまして　乘「お師匠さん〳〵」　日「日乘か　乘「先づ恐悦を申し上げます我が宗門の愈々弘まります所高祖御丹誠の功積で我が日本は愚か外國に至ります迄日宗の弘ろまります時節到來仕まつりました　日「どうも其方ども怪しからん奴だ其方一人があればみな右やうなる一大事を惹起したではないか其上おらが宗論を致すと云ふ事を承たまはり故さらに心配を致してみを然かるべきに手を打つて喜ぶと云ふは如何に若年とは云ひながら何故さう其方は殺伐である　乘「ヘエ〳〵　日「今淨土宗にも其學文佛學の奥を能く知る意傳中々容易ならん者と聞いて居る斯申する日蓮一人の

恥辱あれば夫にて堪へ忍ばゞよし併し此度の同答若も意傳の爲めに其言葉を破られるに於ては我が宗門一派の恥辱に相成る事必らず其方も疎忽なる振舞は相成んぞ　乘「エヽお師匠さん決して御心配御無用でございます初めて面會を致しました時に其意傳と云ふ人の大体了簡は知れて居ります御師匠さんは中々意傳僧正に負やうとは思ひません必らず此度の宗論はお勝に相成るに相違ございません次第に依りますればお師匠樣に代つて私くしが罷り出でまして意傳僧正を一言の下に申し伏せるやう致します　日「ナニ彼がどうも其方はさう氣が勝て居るから困ると仰しやつたけれども併しながら後世名を遺なしまする者は別段でございます日乘後に屈指の名僧に相成りますお人で總じて御出家と申しまする者は幼少だちから遊ひます習しは澤庵でおざいますの或いは一休だの上野の天海

だと云ふやうな名僧があつて昔し名僧があつて今日名僧がいかとお尋ねに相成りまするとお蔭林も迷惑を致しますが今もありませうけれども昔しのやうな御出家はいと必らず私くしは云ふと云ふのゝ肉食妻帶を許すなんて事があるものておざいますから隱れては隨分腥ぐさ物を食たり次第に依りまずれば女位ぬを愛すと云ふ者があるか知れませんが夫に連れると見へてお經の切も賣をしたり何か致しますお布施でも澤山出しますと坊主もお經を讀むのに張合ひがあると見て大きな聲をして節を回して宛然清元を語るやうな工合に行きますが錢の二百か三百も上げたんだと坊さんも大きな聲が出あいと見へて口の内でグッ〳〵云つて居るどうも卑劣千万餘事に渡るやうでおざいますが大德寺の一休禪師と云ふ人は引導を渡すのに死人の頭を鉢槌で叩いたと申します話い

事をしたものでおざいます引導を渡しまするのに死人の頭を鉄槌を持て撫す何と申したかと云ふと西に路あり東に路あり北に路あり南に路あり東西南北皆路あり行きたい方へ勝手に行けコッ〳〵と撫つた末で宜い本來空無一物魂が三界萬靈身体が土に腐つて仕舞へば行く所は何にもあい夫を賣僧に限つてヤレ地獄があつて惡い事をすると地獄へ行つて責られるの善を積ば極樂へ行かれると申しますが極樂へ行つて彼方が宜いと云つて別に端書一枚便りをしたと云ふそんな事もない地極へ行て苦まされて逃げて歸つて來た者もない樂しみ極まるを書て極樂と云ふ事でございます此世に地獄も極樂もあるに相違ない一休樣の側へ武士が行つて禪師にお尋ね申すが地獄は何所であるか一休笑らつて私は地獄を知らん知らないと地獄極樂あゝを悟すべき身を以つておりなぞの口に知らんと

云ふは其の意を得ない賣僧に相違ない覺悟をしろと云つて拇
へ手を掛け二三す扳いた時に禪師ピチリと其の手を押へ夫れ
が地獄だ怒りに觸て人を殺さうと云ふ殺意含む心が地獄だぞ
其武士是れを聞て恐れ入つた最早恐れ入りましてございます
と刀をピタリと納め莞爾笑つた時に　一「ウン其志ざしが極樂
だ是なぞが禪家の悟りでございませう怒りを含んで人を討ち
切らうとする時は地獄心附いてハヤ惡い事をしたと思ふ時は
極樂ださうでございまするから中々昔しは其の出家の修業と
云ふものは武家の恐れ入つたものであります品川東海寺の澤
庵と云ふ人は近江の稱福寺の義禪和尚の弟子で善仁と云ふ十
二三の時に和尚様と問をして三度に一度は勝たと申します
シテ見ると又た名を成す者は別段であります餘まり悧口お者
でございますから義禪和尚が試めして見た　義「善仁や　善「和

尚さんお呼びあすつたか　義「今御飯を頂戴しやうとするとお
衡立に書てある虎が這出して參つて茶の物を食て又彼の衡立
の所へ參つて居る彼所に虎が居ては誠とに不氣味で往のん彼
の虎を縛つて何れへか連れて行て呉れと斯う仰しやつた、和尚
さん戯談じやアありません衡立に書てある虎が這出すものか
と云ふのか當然た小僧、善仁是を聞て　善「エヽ宜しうございま
す只今縛つて參ります之と忽ちの間に臺處へ行て繩引を持て
來やがつた棒一本持て來て　善「和尚さんどうぞ此棒をお持な
すつて　義「何の俺に　善「持つ持つ
お此棒でどうする　善「方かお持ちあすつて　義「持つ
ます縛るがアヽじつとして居りましては縛り惡うおざいます
からどうぞ此棒で追出して下さい和尚さんが追出して「下され
ば私くしが縛りませう」義禪和尚弱つた是は禪家の空々の論と

云つて縛る事も出事あければ追出す事も出事ない棒を夫へ置て　義「温順して居るから今縛らずと宜しいますか何日でも暴れたと仰しやれば何時でも縛りますから」僧「善「左様でおざいまり悪口だから其時に手をゐ打ち遊ばしハタリ〳〵と二ッ三ッ音をさして　義「善仁此手は右の手が鳴るのかと仰しやつた善仁既出して敷居を跨いで向うへ足を出して　善「和尚さん其方から御覧なすつて這入ると見へますか出ると見へます　義「多痴め這入ると申すと出るでのであると斯う云であらう　善「私くしが右の手が鳴たと申したら貴郎は左りの手が鳴たと仰しやるでございませう」どうも往けない夫ッきり捕まずに置ました或朝の事でございますお玄關の前を掃除して居ると旅僧が一人参りました　僧「御小僧〳〵　善「へエお出でなさいまし　僧「野僧は越前の永平寺の僧雲水の者で

ある大和尚御目覺に相成つて居るなれば問答を一とッ参らうと心得て参つた　善「左様でおざいますか夫はお氣の毒様師匠は病氣でございまして臥寢て居ります　僧「ア、御病氣か病氣と云ふなれば仕方がない又御全快を待て問答を願ふであらう病氣と云ふ事を聞て無理に問答をしたいとも云へないから旅僧い行かうとすると掃除をして居た善仁小僧が　善「若し〳〵折角お出てゐすつたものでございますからお師匠様が病氣でも私くしが問答をひとつ参りませう　僧「そんな少なさ姿をして問答が出來ますか　善「何です　僧「そんな少なさ姿をして居る小坊主が問答が出來るかへ　善「へエ是は貴所珍らしい事を云ふ姿が小さいから大きな物が背負なからうとか重い物が擔ぎなからうとか仰しやるなら恐れ入るが姿が小さいから問答が出來ないと仰せられるのはどう云ふ譯小さい姿をして居て

も問答を致す者は致しません山椒は小粒でピリ〳〵と辛い大きな唐辛でも役に立ないのがあります姿ばかり大きいあつて役に立ちません物があるではおざいませんか　僧「此小僧中々理屈を云ふ奴ださう申すなら其の方の言葉に應じて問答をして遣はさう何かありと分らん事があるなら尋ねろ答へて遣はすから其の代り迷やかに答への出來ぬには是宗法であるから持て居る如意で其方の頭りを打つから覺悟をしろ　善「エヽ宜しうございます私くしの云ふ事が貴所に分らないでお答へが出來ないやうでゐるから持て居ります高箒で貴所の頭を毆るから其積りで　僧「毆る酷い小僧がある承知した何だどう云ふ事を尋ねる　善「左樣でございます」と暫らく考がへて居たが　善「私も參會と申す旅僧の方で說破と答たへた間答する前には斯う申すもの四邊をグロ〳〵見て居たが夫れッきり何んとも云

はないから旅僧も何にも言はんものと思つて樣子を伺つて居りますと善「仁大音を揚げて　善「インセッ、チャノダンビャウ、ズカ、ラクイ、は如何に」旅僧暫らく考がへたが分らないと言へば負たのだ　僧「ウンと迫つて仕舞た。善「インセッチャノダンビャウ、ズカッ、クイは如何に　僧「ウム」どうも答へる事が出來ない三度善仁が問つた三度云はれて答へが出來あければモウ負けだにも違ないので、彼の旅僧眞青になつて一言の答へも出來ないから、考がへて居る間に高箒で頭を、ポカリと毆ちまつたのでも旅僧は驚ろいて横ッ飛に飛んで逃げて仕舞た、此騷ぎで住持がお目覺めなつて　義「善仁何を其所で喧嘩をして居る　善「唯喧嘩あそばす致しません　義「何だ　善「只今旅僧が參つて問答をして私くしが勝ましたから夫で頭を毆つて遣たので　義「其方に負るやうな事で問答をして國を歩くと云ふのは怪しから

ん奴のある者た不學の奴と見へるどう云ふ事を其方が聞たん
だ　善「左様でございます是い少と難かしい事でございする
お和尚様にも分りますまい　義「酷い事を云ふ奴があるものだ
師に分らんと云ふ事はない申して見ろ答へて遣はすから　善「
畏「畏度お答をなさるかなといつてマア
話しをしろ　善「インセツチヤノタンヒヤウズカスクイとは如
何　義「ウム何だへ夫は　善「分りますまい　義「分らん　善「どう
しても分りますまい　義「どうしても分らん　善「私くしはお師
匠さん餘程考がへた先きか雲水の僧でございますから大体の
事を申しても知つて居ります　義「成程　善「ソコデ私くしは知
らん事を聞たんで　義「どうも剛い奴ぢやな即智即才と云つて
知らない事を聞く何を聞た　善「彼の向うに雪隱がございます
彼の雪隱の側に瓢箪がなつたのが段々蔓が延て來まして雪隱

の屋根の所へ出て來て彼所に瓢箪が降下がつて居ります彼を
聞たんで　義「何だ詰らん物を聞く奴だ何と言つて聞たか　善「
雪隱の屋根の瓢箪の數幾許と云へば分るから夫を倒さにして
インセツチヤノタンヒヤウズカスクイ和尚さん呆れた酷い小
僧があるものだ是は知れやしないどんな學者でも分らない是
等が即智即才でございます後に至りまして品川東海寺の澤庵
と云つて有名な人でございます澤庵禪師をお成り遊ばしたか
ら然人が花魁の画を書て持て來て是に禪師に賛をして貰ひ度
禪家の御出家だから花魁の画に賛はしまいしまいと云つたら
一ッ恐れ入らしてやらうと思ました企画で參りました、スルと
禪師は笑つて　澤「アヽ書て遣ると仰しやつて直ぐに筆を染て
佛は法を賣り末世の僧は祖宗を賣る汝五尺の眞中を賣て一切
衆生の煩惱を休んず色即是空空即是色柳は綠花は紅いの種々

か

池水に夜な〳〵月の通へとも
心も止めず日影も殘さず

と歌を夫れへお認めになつた賞に懷中に充分のお貯はへにあつた人でございますから何にか日慶のことに就きまして澤庵のお話しをして恐れ入りましたが序でおがら少々もうし上げて置きます此の日乘と云ふ小坊主は至極喜こんで居ります

のをどうも日慶のことごとく心痛をして居ります扨て伊勢の守立ち歸へり右の次第を伊豆の守へもうす伊豆守より上樣へもうし上げました改めて又た日慶僧都の趣むきを意傳僧正のもとへもうし越しましたから意傳に於ても是れを聞いて喜こびこゝに評議一決いたし二月十六日を當日と云ふことにあひ成りまして十五日の日に再たび本光寺住職日慶のもとへ對

し瀧川伊勢守より御沙汰明日午の刻と云ふ事に相定まりましたを是を聞た日慶長こまり奉まつりますとお受を致して千秋の思ひ十六日の當日を相待ちまする然るに十五日の夜前申しました日乘師を案じまして茲に忠義の志ざしを現はしまするが師弟の對面のお話しに相成ります

第十一席

寛永十五年二月十五日の夜御居間に御在でに相成りましたる日慶僧都は明日一日が大切の日一夜千秋の思ひと云ふのは是でございませうか頻りに越方のことを思ひ明日意傳がどう云ふことを尋ねるか次第に依つてはモウ明日にも落命を致すの思召し御自分よりあつても經卷を數百卷枕邊へ置れ頻りに其經卷を開ひて厳々の所を讀で御在でなさるアー〳〵と云ふ水の音、何者が水を浴て居るか未だ春とは言ふ條二月の十五日稍か

寒氣も殘つて居りまするのに水を浴る者があるから漸う〳〵に御立ち遊ばしたるあとにして日慶は少しく窓の戸を開ひて御覽に相成る十五日の月白昼の如く春の月は何とおく穏かでおさいます左り手の井戸館の前の所を見ると大きなる桶へ汲溜て置ましたる水をザアー〳〵〳〵〳〵浴て居りますのは日乘オヽ〳〵扨は日乘が水行を取るかと思召して居る手を拍したることに致したる日乘一生懸命大きな聲で高祖を祈り奉まつり何卒明日の問答御師匠様の御勝を示しまするやうに御師匠様の御勝に相成りまするやうにと水を浴び一心不亂に高祖日蓮大菩薩を祈り居りますのを御覽にかりましたる時には日ウーム若年あがら彼れがおせることと一々感心致たす　日日乘〳〵　乘「お師匠様でございますか　日水行が濟だら是れへ參れ　乘「御目に留まりしまして恐れ入りましてござりまする　日「

イヤ〳〵別段に叱りは致さん申し聞せることがあるから是れ〳〵……暫らく致すと漸う〳〵それへ罷出ました　乘「何ぞ御用でございますか　日「明日のことを案じ若年ながら其方水行を致し高祖大菩薩を祈り呉れるが必らず身体を大切に致せよ明日の問答が生死の境再たび其方に面會を致すあともあるまいか」と思ふ老て居る日慶の身を案じ呉るな其方の身を大切に致せ若し明日の問答に日慶其言葉に詰り意傳に必らず言ひ破られる其時は何に面目あつて一涙の者へ對しての申譯が立たうの拙者に於ては自害致すが其方も此上共に佛學修業を遂げ假令意傳が後落命をすると雖も淨土宗に向つて日宗の密大なる事擂め時を待て其仇討ちを致して呉れよ　乘「エヽ御師匠様怪しからんことを被仰います此件に就きましては此日乘若年の身として却つて上様成らせられましたる時に御小納戸何某

寒氣も殘つて居りまするのに水を浴る者があるから漸う〳〵に御立ち遊ばしたるゐとにして日慶は少しく窓の戸を開ひて御覽に相成る十五日の月白晝の如く春の月は何とゐく穏かでおざいます左り手の井戸館の前の所を見ると大きなる桶へ汲溜て置ましたる水をザアー〳〵〳〵〳〵浴て居りますのは日乘オヽ〳〵扨は日乘が水行を取るかと思召して居る手を拍したることに致したる日乘一生懸命大きな聲で高祖を祈り奉まつり何卒明日の問答御師匠様の御勝に相成りまするやうにと水を浴び一心不亂に高祖日蓮大菩薩を祈り居りますのを御覽にありましたる時には日ウーム若年おがら彼れがおせることと一々感心致たす　日日乘〳〵　乘「お師匠様でございますか　日「水行が濟だら是れへ參れ　乘「御目に留まりしまして恐れ入りましてござりまする　日「

イヤ〳〵別段に叱りは致さん申し聞せることがあるから是れ……暫らく致すと漸う〳〵それへ罷出ました　乘「何ぞ御用でございますか　日「明日のことを案じ若年ながら其方水行を致し高祖大菩薩を祈り呉れるが必らず身体を大切に致せよ明日の問答が生死の境再たび其方に面會を致すゐともゐるまいか」と思ふ老て居る日慶の身を案じ呉るな其方の身を大切に致せ若し明日の問答に日慶其言葉に詰り意傳に必らず言ひ破られたる其時は何に面目あつて一派の者へ對しての申譯が立たうの拙者に於ては自害致すが其方も此上共に佛學修業を遂げ假令〳〵意傳が後落命をすると雖も淨土宗に向つて日宗の密大なる事攝め時を待て其仇討ちを致して呉れよ　乘「エヽ御師匠様怪しからんゐとを被仰います此件に就きましては此日乘若年の身として却つて上様成らせられましたる時に御小納戸何某

と云ふ人と爭ひを致しましたるのお源因でございまして宣傳僧正が御入でにありましたる時にも相當の御挨拶を致すが然るべきを若年の身として宣傳大僧正へ對して一言の下に吃致しましたに就き第一御師匠様が右様なことに相成りますれば私しは冥土の御供を致しまして黄泉へ罷越し高祖の御側に修業を致しまする　日「イヤ〳〵心得違ひを致すな必らず其方は生長て日宗を致すの僧に相成れよ死ぬると云ふのはそれは其方の心狹ひのだゥム其方は若年に似合わず師弟と云ふのは深き前世の因縁であらう其縁とは盲ひながら野僧の爲めに次第に依れば死あうとまで覺悟致して呉れたるか辱じけない然らば師弟の物語りに鷄鳴曉きを告げるやうあみとに相成りました兎角くする間に日慶わ於ても其の要用を十分に致しまして當日を相待ちまする若年ながら日乘も今日こそ大切と思ひ

まするから其身体を愼しみ早朝よりして高祖の御木像の前に至り一生懸命に普問品を讀誦致して居りました然る處當日に於ては御忍ひでございまして三代の將軍家光公にも此經王山本光寺へ成せられまして御供の人々には酒井讃岐守土井大炊頭青山大藏大輔中井信濃守森川出羽守松平伊豆守はじめと致して一同之れへ罷越しました林道春大久保彦左衛門東海寺の澤庵はじめとして何れも上様の御側へ附添て當日に於ては御掛りは堀田備中守殿へ仰付けられました相列んで居りまする天下の役人綺羅の如くでございました扨芝三緣山增上寺より して意傳大僧正四ッ頃はいから御乘込に相成ました意傳僧正の御例には奥住萬慶吉良舊我と申します兩名の僧が附て居ります間答の席に進むやうに相成りました是は本堂を當てられましたる者少々隔てました所に御簾を下し其中ゐは恐れな

がら三代の家光公餘所ながら之を御聽取に相成ます所と見へます御老中方はじめ御大臣方は何れも次の間に相控へて居ります日慶僧都は何分にも病氣でございますけれども法衣の用意十分に致しました日乘梅仙と申します二人の出家に勸はられまして漸うくのみとにして其席に着致しました之を等分に致しまして東の方へ意傳が扣へ西の方に日慶が扣へました互いに其所へ出でましたが先づ一言の挨拶も致さんスルと出て居ります諸侯の申には日蓮宗の人もございませうし淨土宗の人もあらう是は自からカを入れまする筈斯くいふ時に傍聽を許した日には大變でございます事を成たゞ隱便に致すが爲めに決して唯今で申す傍聽と云ふことは許しませんとして控へて居る堀田備中殿此所へ入り兩僧へ對して言葉を開きけるは

備「此度は增上寺住職意傳より致し日慶に向つて即ち

宗門の議論を致したくとの由上に於ては格別の思召しを以て之を許されたあれども宗論の事の起りとして世々國を亂すのことあるは能く人の知る所なり如何あるゝに相成ればとて必らず宗論を敵とすること勿れ此段を兩僧へ對して某がしより申入る」兩僧共委細畏まり奉まつる由を御受けを至しました此時に至りまして意傳は日慶の樣子を見て在したが　意「如何に僧都へ對して申す病中の心を動かし賊に以て意傳一言此件に就て申譯なくあれども今日にして己むを得ざるの場合拙僧り尋ねることを一々答へられるかモウ日慶は此時にはハッ〳〵と息切れがして居る　日「如何にも意傳の申される通り互ひに宗門は大切なり之を保護するは出家の即ち道なり此場に至つて我が宗門を以て此答へを致さんは御同樣斯く申する日慶又淨土宗に向つて相尋ねるゝもある其時ゝは答へられるゝ　意

如何にも尤も然り　日「茲に日慶其前み一言を示したきとあり今日は天下御重役一同の當寺へ御越しに相成り今此場合に至り互に宗旨を以て其志しの奥を語る其場合に臨み若し吾宗の及ばざると云ふ時には意傳速かに法衣を脱て吾門下に下るが如何に」意傳僧正ニッコリ打笑ひまして　意「應能よそ言はれたり日慶吾又思ふ所汝に尋ね其答に苦むに於ては速かに法衣を脱で今日より浄土宗に改宗と去て吾門下に下れるや　日「如何にも承知いたした此段を堀田備中殿へ對して御聞役を願たい」あんでドウも御出家の爭ひは大變だ勝負が付いて仕舞へば日蓮宗が勝てば意傳僧正が法衣を脱で日蓮宗に從はなければならでございまして私しのとばかりではなん又浄土宗が勝てば其通でございまして手に汗を握て居い宗派一統の是は恥辱に相成とでムいまして

ます先意傳に致して尋るとあらば其所に於尋給と日慶一言を

殺したり此時に意傳席を少し進め　意「然らは拙僧よりして日蓮宗に向つて相尋ねるみとありとて茲に意傳始めて問答の緒を開きまする一席

第十二席

意傳は日慶に向つて　意「第一尋ねたさは夫れ日蓮宗のものは常々念佛無限、禪天魔、眞言亡國、律國賊、日宗無毒と法華一念の成佛と申する事を申し居る念佛へ無言地獄へ落ち禪宗は天魔の處爲あり眞言は國を亡し律宗國賊と云ふは此上もない惡口あらすや日宗無毒と法華一念の成佛とは如何に」日慶之を聞いて是爾打笑ひました　日「何者が右樣の事を口にするかは知られども拙僧に於て右樣の論にもあらざることを口にしたる覺はない　意「アイヤ仮令日慶已れの口より言はずと雖ども其宗派の者是を常々喧ましく申する處を耳にしながら少しも制せ

さるは之れ貴僧の落度あらずや第一念佛無限、禪天魔とは如何に　日「意傳僧正には珍らしき事を尋ね給ふ者かな之れ小兒の戯れに均しき事にもて敢て此場に論ずるの必要少しもなし　意イヤ論ずる必要なしとは申されまい法華一念の成佛とは他宗を譏り他宗を惡しさまに申するの言葉あらずや如何あればそ法華一念の成佛と云ふや　日「されば法華と申する事を意傳には只日蓮宗の事とのみ思はれるが夫れ法華と申すは法の華と認むる諸宗も法の華あらざる事少しもない法華宗一念の成佛とても申さば其の時こそ咎められて然るべきに法華一念の成佛禪宗も日宗も眞言宗も總して法の華、之れ佛に仕へ奉まつりまする僧侶の身にして法の華を知らざることあるべきか何れも法の華を悉と愛し給ふ法華と云ふ事を日蓮宗とのみ心に思ひ居られると見ゆる法華たることを御存じあくば此處に於

て日慶明かに其意を示さんありと仰せられたる時に左しもの意傳アッと言つたが　意是は惡い成程法華と云ふのは何も日蓮宗ばかりが法華ではあい禪宗も眞言宗も淨土宗も何れも諸佛の愛する法の華を知らんものは一人もない法華一念の成佛は何も日蓮宗の成佛ではないそんな小兒の戯れ同樣な事を尋ねる方も大に笑はれる意傳僧正は暫くの間口籠つたるが日慶言葉を續いて　日「何か日宗の部に於て解せざる言葉あるなれば其の事を問ひ給へ吾又た淨土に於て分らざる事があれば夫れを尋ねる小兒の戯れ同樣な念佛無限、禪天魔、眞言亡國、律國賊、法華一念の成佛なぞゝ申する左樣な事を荒だて給はゝ却つて貴僧の格位を落す樣なものでおざるから何か日蓮宗に就て問ひ給へ夫に聽してお答へ申さう」ッンと意傳も少しく詰まりましたるものと見にて暫らく頭を下げて居た、事を早まつては宜か

んものでございまして側に附て居りましたる吉良舊我、奥住萬慶の二人お手に汗を握つて居ると又た問答に掛らざる中に突然和尚様が一つ閉口をおすつた様子何なりとも尋ね給へと云ふ時に臨んで已に意傳僧正が何か仰せられたら格別暫くの間眼を閉ぢ口を結んで居られましたから其處で萬慶と云ふ人が之が師匠が此場に答辨に苦るしむと思ひましたからお掛り備中守様へ申上て　萬「意傳の儀は持病差起りましたるものと心得ます願わくは問答の儀は三日間の御日延べを願ひ奉まつる萬慶が七日間のお日延べを願ひ出した、其時に意傳意「アー之れ」と止め様としたが好けあい備中守此時に至り　備「意傳僧正に は俄かの病氣とあれば是非に及ばん七日間の猶豫をいたし遣はす藥用手當をいたし改ためて問答をいたして宜からう御立座」ふ次ぎに於て御立座觸があります、上様始め、アー」とお

引取にあつた此時に側に就て居りました梅泉、日乘の二人に於てはモー小躍をいたします位ね、日慶を痛はりましたる事でございまして、其儘にして御病間へ御案内を申上げました、今なら日蓮宗万歳とでも云ふ所だお乘物へ召されましたる事あして意傳僧正は其儘にいたしてお引取よ相成つたるが餘り心好からん、三緑山増上寺へお歸りに相成りまするとと　意「萬慶を呼べ」と仰せに連れて萬慶が夫へ罷り出ました　意「一同の者遠慮いたせ、萬慶さて先刻は其方早まつたナ　萬「ヘイ　意「我れ何しに日慶の爲めに閉口すべき、未だ問答に這入つた譯ではない小兒の戯れの如きことと日慶の一言、アー左様かと思ひ、改ためて其の日蓮宗に就いて相尋ねべき事を胸中に考へて居る中に其方が病氣と披露をいたし七日間の日延をなす、云ひと今日の問答は野僧が則はち閉口をいたしたる様なものあれど深く考

へて見れば師を思ふの處よりして其答に差詰つたと思へばみそ日延べいたしたる方に罪はあい、罪はないが此の上共に必らず早まつた事をしてはならん」萬慶之を聞いて眞青にあひ成つて「恐れ入りましておざりますお師匠様のお答へに暫らくの刻限を費やす處を以つて若し御答へに惱ませられましたる事ではあいかと相心得ました夫れ故にお日延べいたし候段重々恐れ入りました」意「併し七日を過つて再び日慶に遇ふて其時には我れ其の宗門の奥を對尋ね其の時にみを問答なり今日は未だ其問答の席に只だ列したるだけ、アーどうも殘念の事をしたと仰せられました意傳と云ふ人が問答にも掛らないのに負ける氣支へはあい、まだ勝敗がつかあい問答の主意を互ひに述べあい小兒の戯れの樣な云はゝ噂さ事を尋ねただけだ此の七日の日を悉とく意傳は相待つて居る時とお話し遊りまして

三代の家光公に於ても御歸城ならせられますと直に伊豆守を御召に相成つた伊豆守何事と心得て御前へ罷りいでました元よりいたして活達な君でお居で遊ばすから大分御不機嫌で入せられます　家「伊豆守今日の問答未だ其糸緒を開かざるとは申しながら病中ながら日慶は天晴れ申す事面白い意傳ものを尋ねべき位置にありあかから今日の有樣何事なるか余が熟々考へるのに無常の風は時を嫌はずと申すことゆゑ何時鬼瓶に入らうも其の時には意傳の如きものに引導は余は滿足せず依て只今より改宗をいたさうと相心得る、此段沙汰致すから左樣心得よ、改めて身延本山より日英大僧正を招いで余が只今より改宗を致すと一言仰しやつた此お言葉がかかつたら左程の騒ぎではなかつたが前回より申上ました通り家康公が御入國の時に存應和尚へ對して菩提院として〳〵とお約束を遊ず、處が

三代の上様の口から改宗をして日蓮宗にあると云ふ事に成た夫が公然に相成ますれば宗徒一般の之は大いなる失策ゐ相成る伊豆守之は何も直に御意見をするゝ譯ゐも相成ん　伊委細畏みまり奉つりましてでざりますが老臣へ對して一應申し合せ年寄共評議の上で御答へ奉つる」と仰せ其場に於て逃れました

が之は忽謂あらん事でございます方の一同を集め茲に御評議を遂らるゝと云ふ事に相成ました

が打てば響くとやら假令の通り、ハヤ漏れ聞へ、一方に於てい彼日蓮宗の本山身延此の身延山よりして日英大僧正を御呼び相成りまする位でムいますから勢ひ旭日の昇ります有様早くも此の事が淨土宗へ知たる事でございますから、サー淨土宗一般のものに於ては大に驚き徳川三代に致して將軍の己よ御改宗にふり日宗にも傾く様ゐ事に相成る時には宗中の大恥辱でム

いますゝ之を聞いたる意傳に於ては手に汗を握る如く恐怖いたしモー七日の日を待つて鬼角と云ふ場合ではない時でございます時に伊豆守殿、酒井讃岐守殿と申し合せて御改宗あるつてもならんでも此儘に捨て置く時には一大事どうかないたして仲裁をと云ふた處が中々此件に就いて仲裁を引受けまする者はゐい時に大久保彦左衛門、林道春の考がへは品川東海寺の澤庵禪師が宜しからうと云ふので澤庵の許へ内々伊豆守殿よりいたしてお問合せにゐると云ふヒモー今日の事をお聞き及びに成りましたから大方御改宗だと思ひましたから却つて其の中間ゐ在りて和解を取結ぶを云ふ役を申し付けられるのが幸らいと早くも察しましたるものと見えまして何れへ參つた澤庵行術知れず行脚に出たと云ふのでございます役員一同如何はせんかと思ひますと、どうしても之を扱かひますものは川

越の喜多院の南光坊天海より外はございません天海僧正へして相願はんければならんと御老中方お手を廻はして頼ふ尋ねると天海僧正には比叡山にゐ出でになりましたと云ふ事が分りましたので人を撰らんで比叡山延暦寺へ遣して天海僧正をお迎ひに遣はします宗門の爭ひを天海が扱ひます一條に成相ります

第十三席

三代の將軍家光公俄かに日宗へ御改宗あさると云ふ事を仰せ出された倫敦は汙の如く上意風の如しと言つて上ッ方が一言仰やられたるは中々是を俄かに取消すと云ふ事にはありませんん御老中伊豆守に於ても大きに當惑を遊ばし御改宗の儀は宜敷ございませんと申し上げる譯にも往かずさうも今日の問答の結果意傳僧正の方が少しく問答に早まつた所があるしさう

云ふ者が引樂でい滿足せんと云ふ仰せを蒙むれば據ころございませんから御改宗の沙汰にもならふければならふいけれども若さう云ふ事になれば淨土宗同宗の者はどの位お上を恨むか知れん今天下泰平とは云ふぜう何かに就て事を起さんとする者あるの際宗論の爲めに騷動を惹起すと云ふやうな事があつては相成らず勿論未だ淨土宗の方へ表向き御改宗の御沙汰があつた譯ではございませんけれども其所沙汰は罷すしうございますから愈々意傳僧正お於ても是は飛だ事が出來致した自分の身を痛めるばかりではない一山の僧を初めとして江戸表府内淨土宗の僧侶に於ては何れも增上寺へ集會をすると云ふ事にかりまして此上の策を取らんければならんもうしたら宜しからうと評議に及びました今一同の者は居並んで是から善後策を施こさうと云ふ所へ舊我が周章しく和尚樣

德川十五代記

の側へ參り　舊師の坊に申し上げます　三何じや　舊只今部屋の内にて萬慶の儀は落命仕まつりましてございます是を聞て一同の者はハツと驚ろいた萬慶と云ふ人は前回にも申さ上げましたが品川問答の時に師の側にあつた人で年齢四十二歳になる淨土宗では其頃はい用られた程の人でございます　三舊左樣でおざいます書置を殘し置きまして是は和尚樣の手に殘るやうに又手前共への書面も此通りおさいます」と夫へ取出したる書面即はち師匠へ對しては詫書でおざいます披いて御覽になると一昨日本光寺へゐ出でになり未だ問答の結果も見ざる其内に談つて病氣の披露を致して七日の間猶豫を乞たるが爲めに上樣には悉ごとく御立腹の体にて承たまわれば此度日蓮宗へ對し御改宗に相成る由、是全たく萬慶のなせる罪に相違ございませんから蓮しんでお詫を致し就ては手前自害をなしてお詫を仕まつるに依て何卒寺社奉行へ伊改宗無之樣御取計ひを願ひますと云ふ事が果々く書てございます文体と云ひ筆續と云ひ萬慶の事でございますから其書置の内には胸も迫り涙も流れるやうな事が多く認めてございます意傳和尚是を御覽になるとハラ〳〵と涙を流し　三「アヽ我れ茲に殺生戒を破れり何しに萬慶一人の罪をあすべき拙僧が用ざる茶坊主の眞似をを致して本光寺の日乘と申す者に戯むれたる爲め斯る大事を惹起し萬慶一人を矢ふ全たく此意傳が誤りゐ相違ないと悉ごとく御後悔の体流石に萬慶は死を以て一宗の恥辱を雪がんとおせしは其志ざし賞すべき事でございまする中には早まつて事をなしたと申す者もおざいますが意傳に於ては甚く心痛を致す一方に於ては種々ある評議を遂げて居りまする中に意傳は經陀羅尼を唱

へ萬慶の死を吊らつて居ります時に大久保彦左衛門、林道春等は大層心配をして是は餘人では迚も扱かひをする事は出來ぬ東海寺の澤庵に限ると云ふ處より松平伊豆守家來岡野の庄左衛門と云ふ人を東海寺へ遣はしました、庄左衛門は番僧に面會をして禪師にお目通りを申し入れ度旨を申し入れると番僧の答へに　○「禪師は不在でございます　庄「ハヽア何れへお出でにおつた　○「何れと申して改めて仰せ置あつてお出掛には有ません御傍を召上りかけで俄かに松島の景色を見たいと云ひ箸を置て草鞋を穿きお立出でにある事もあるし、雪隱へお出でなすつて出て參ると直ぐに草鞋を穿いて其儘何れへか へお出でにおさる事もございます何所へお出でにありますとお尋ね申しても足の向いた所へ行くと云つてお出掛にある日數十日か十五日位か掛る事もございますするで又出ると問もおく

つてお出でになる事もございます實にどうも行く所の知れぬいふ人でございます抑々此澤庵と云ふ人は一旦徳川家のお咎めを蒙むりました人でございます、前に一寸申上げましたが二代將軍秀忠の姫宮かづ子様が京都へ御入興遊ばされる時に公武合体と云ふ事を計りし時餘り武家の權が高くなつて公卿の威の衰ろへたる事を怒りて右の次第を恐れながら十善万乘の君へ申し上げました人が此澤庵禪師に玉室紅月と云ふ三人で何れも容易ならん人でございます此儀に就て澤庵玉室の兩僧へ對し紫衣を賜はりました其中にどう云ふものであつたか江月と云ふ人は紫衣を賜はりません是を悉くと怒つて其人徳川家へ對し反り忠を致し實は澤庵王室の二人が斯様〳〵に奏聞を致したを密告致しました何しろ徳川の勢はひ強い時分でございますから夫が爲めに澤庵に於ては羽州上山城主土岐美濃

守へお預けつけ玉室は奥州棚倉の戸田長間守へお預けになりました其時に水の尾院の御製がムいます

五月雨に澤の庵も玉の室も
流れて殘る濁り江の月

澤の庵は澤庵玉の室と云ふは玉室濁り江の月と云ふは江月と云ふ事にて江月一人が反り忠をしたから右樣になつたと云ふ事をお讀みなりました物と見へます、玉室と云ふ人は遂に棚倉へお預け中病死を致し澤庵は土岐美濃守へお預けとなつて居た所三代將軍悉おとく明君でお在でゐるから反つて澤庵を恨む所はふく一旦お咎めがあつて土岐美濃守へ對しお預けになつて居たが三代將軍は反つて其澤庵の志ざしを賞美致し罪を許して改めて品川へ東海寺を建立し澤庵禪師に授られました然ば澤庵禪師は三代の上樣に對しては恐とく厚恩を受て居ます人で前申し上げました通り伊豆守の家來岡野庄左衛門右にお尋ねゐありますと何所へゐ出でにゐりましたか知れないと云ふ事で　庄「何か言置きはなかつたか　僧「何所へゐ出でにゐるにもトンと申してお出でにゐる事はございません、けれども手前に對し一言仰せがございましたのは、品川間答の儀に就て事に依つたら扱かひを頼みに來るかも知れんどうも此事件は容易からん事であるから迷惑の來あい内に一廻り廻つて來やうと仰せられました　庄「一廻り廻つて來る何所へ廻ると仰しやつた　僧「左樣でおざいます夫は仰しやいませんが何でございませう日本國内でございます外國へは參りますまい」篤ろいたのは庄左衛門仕方があいから立歸つて其旨を伊豆守へ申し上げると扱は面倒と思つて早逃げ出したものと見へる此上は仕方があいから川越の喜多院天海僧正へ頼まんと心得、心あ

る人も夫へ目を附けましたから改めて喜多院の様子を尋ねると、川越にお在ではあい、御案内の通り上野東叡山寛永寺は三代將軍が天海の爲めに建立を致した所が出來上ると御自分は矢張り喜多院へ引取つて仕舞ひまして、江戸には一向在らつしやいません、川越の喜多院にのみ在らつしやるからソコデ喜多院の方へお尋ね申した所が先月末に比叡山へお出向きになると云つてお立出でになりましたとの事で、ございます、ソコデ伊豆守に於ても何者かお迎ひに遣はして是非ともに取扱かひをを願はなければふらんが誰が使ひに宜からうと段々人撰をした所が其頃はいの若年寄でおざいまして内藤若狭守、此お人は年も寄て居るし、至極天海長老に交際も厚うございますから、若狭守を遣はす事になりましたけれども表向いて内藤が天海の迎ひに行くと云ふ事が知れると又避て仕舞ふと思ふから

忍びでおざいます漸々四五名の家來を連れて、若狭守殿お出でにありました途中別段にお物語りもなく斯う云ふ時には仕方がないからどうも急いで參り京都へ着しました比叡山へ早速に若狭守罷り越して、尋ねました所がお留守居の僧が、立出でまして面會を致し　僧「何に御用でございますか　内「拙者は内藤若狭守と申する者當山に天海長老お在であらば少々御面會を致したう存ずる　僧「折角の仰せでございますが先刻お立出でになりました　内「扨はお立出でよなりましたが何れへ向つてお出でになりました　僧「左様でございます夫は分りませんが、モウ比叡山も厭たと仰せられてお獨りで草鞋を穿てお出でいありましたが、何れ關東へお歸りになつたと存じます　内「ハヽア左様でございます、二タ時程も經ちます餘程時は經ましたか　僧「左様か」と内藤若狭守叡山を下りましたかと存じます

が果して關東表へお出でにあつたの、夫共川越へお歸りになりましたが時どして九州地方あぢへお出でにおる事もあると云ふ事ゆゑ其行先がトンと分りません若狭守も困つて京都所司代板倉伊賀守に就て、お尋にありました所、伊賀守も心配を致し東海道筋へお出でにあつたならば大体大津邊りで追付く事になりませう、と云ふので、若狭守伊賀守より、馬を借用して其馬に乘て乘切りました、然るに急いで參りまする成程伊賀守の目を附た通り、大体水口が大津を出離れた所邊りで、お目通りが出ぬやうと急いで來と丁度草津の宿の中程の所へ參りますと、ソッと云ふ騒ぎである若狭守馬上から見ると人足卅人斗り取卷て居る眞中に大きな坊主が立て居る天海は七尺に越て居た人で人足其所を取卷てワッ〳〵と云て居る何事と心得て若狭守馬を止めて見ると、天海長老に相違ない、人足の云ふには　○「ねへ

坊さんお前さん方のほうに五戒と云ふ物があるか五戒と云ふのはどう云ふ事だか教へて呉れ　天「貴様達は五戒が聞たいと云ふのか出家の方に五戒と云ふ物があるさうだが私は知らんそんな事は一向撞はんで酒も呑む女も隨分愛す別に物の命も取る彼は隨分面白い物で肉の新らしいので一はい呑んで女も側へ置いて爾して偶には泥棒でもしてお　○「飛でもねへ坊主だまアお前さん全たく五戒を知らないのか　天「私は知らんし知らんから今お前方に斯うやつて奇められて居るぞうぞ勘辨して呉れ勘辨をする事が出來なければ仕方がないお前方の勝手次第どうとも為るが宜い坊主になれと云ふなら坊主にもなる　△「巫山戯るな坊主の癖に坊主になれやしない　天「イヤ坊主にあると云ふのは是から五戒を守ると云ふの　今までは五戒あやを立つる事は出來なかつたから俗人も同じ事であつた

やうか勘辨をして貰ひ度」と云ふと一人が　○「喜十や仮にも衣を附てるお方が濁酒にもせよ酒を呑むと云ふ法はあい太へ坊主だから疑程取つてやらうと思ふが錢があいと見へる此腥さ坊主殿つちまへ〳〵　大勢側へ寄て既に亂暴にも及ばんとする所へ參りました若狭守は片寄れ〳〵と云つて進入つて來たが武家の勢ひは別段な物で人足は間を開けました片側の所に馬を繋いで大地へピッタリ手を仕て若狭守　内「喜多院様でおいさすか　天「誰だ……ヤ……ヤア若狭かへ」傍はらに居た人足は驚いた何だらうと驚して見て居ると　内「喜多院様には是ふ何をしてゐ在で遊ばす　天「イヤ立塲で神代酒を呑んだ所人足が見て酒を呑むと云ふ事はないと云ふから呑んでも構はん私は呑たくなれば何でも呑む肉でも何でも食ふと申した所此通り大勢に取圍まれて、ヤレ腥ぐさ坊主だの五戒を破つたのと

云つて私を仕方がないから大勢を對手に話して居たのにが若狭此邊は人氣の惡い所であるの　内「左様でございます不埒千万な奴で早々〳〵支配……へ申し附け一人殘らず人足を召捕て處刑仕まつるでおざいませう　天「イヤ〳〵左様に申さんでも宜い斯様に人の形はして居るけれども動物同様な人足であるから捨置け〳〵」と聞いて人足共一同は驚ろいた　○「何だ天海様だと云ふが大變な事をしたと云つて居る所へ忽ちの間お代官樋口九郎右衛門夫へ罷り出で大地へ手を仕て頭を下げたる事にして　樋「是にお出でになりますは天海僧正でございますか只今京都所司代より御達しがありました心注す致して路次警衛も仕まつりませんで甚は恐れ入りました人足共一同逃る事はおらんぞ左様心得ろ甚得ろ貴僧に對し怪しからん事を申す不埒な奴だ殘らず召捕へら左様心得ろ」と聞て人足は驚いた　○「

是い飛んだ事を申しまして相濟ません全たくさう云ふ方だと存じませんで失禮を致しました　天「コレ〳〵彼のやうに誤るから許してやれ若狭其方の參つたは何か宗旨の事　就て本光寺の日慶と宗論の爭そひを致した趣むきだがどうも宗論の爭そひと云ふ事は難かしいもので其事に就て手前に對し止むを得ず參つたが　内「お察しの通り恐れ入りました老中初め一同夫れが爲めに心痛をして將軍家に於いては御改宗に相成る旨にござるに依つてどうぞ取扱かいを願ひ度く存じ能り出でました　天「ナニ將軍家が宗旨を變ると……イヤ夫れは穏やかでない宗論もするが宜い勝負を決つするが宜いが上樣が御改宗になると云ふは甚はだ穏やかならざることとして夫れが爲め淨土宗一山の僧侶どの位らぬ心痛をするが其の詰果上を恨らまされるやうな事に相成るが何んに致しても困まつたことが出

來……だ彼は如何致した澤庵は　内「右の件に就て東海寺へお尋ね申した所が澤庵禪師は何れへかお出でになつて只今御留守でおざいます　天「ア居ないかさうならう彼の男中々悧口の男だから上樣に對し御高恩を受て居ると云つて宗論の爭そいにロを出しては面倒と思ふ所から澤庵は何れへか避けたと見へる又私はさうでない其事を承知したから江戸表へ參つて兎に角此仲裁を扱かはうと心得て參る所だ　内「恐れ入り奉まつるお乘物万端の用意只今仕まつります　伊「イヤ〳〵別段乘物の用意をするよは及ばん若狭馬に乘つてるな　内「ヘエ京都所司代より馬一匹借受て參りました　王「アヽ借て來たか借馬か　内「恐れ入ります　天「夫では私は其馬に乘る　内「大事でおいませんどうぞお召し下さいませ　天「アヽ是は返さんでも宜い伊賀は所司代だ馬の一頭位ゐ返さんでも宜い私は是へ乘

ると天海上人右の旨にお召しにおりました一同の者はお答めでもあるかと心配を致して居りました所反つて御酒を下し置れ一同其思召しを深く感じ入りました扨天海上人は右の馬に乗りまして江戸表へ参られる途中品川東海寺へお立寄りに相成りまするとて丁度其時幸はひ澤庵禪師も戻りました兩僧此所に於て言葉を約し一人は意傳の許へ参り一人は日慶の許へ参りまして改めて兩僧の志ざしを確かめ扨天海澤庵の兩名僧が將軍家に近附き御改宗の御意見を入れまするお話し

第十四席

芝三縁山增上寺意傳大僧正と品川經王山本光寺住職日慶との宗論をお許しにありまして此件に就ては前回も申し上げました通り此扱ひを南光坊天海僧正へ對し御依頼にありました之は松平伊豆守酒井讃岐守の計りましたる處で天海は京都の

比叡山に居りまするのを若狭守が迎ひに参られたる事は申し上げて置きました、天海も之に宗論をさしては宜しくない何方が勝つても却つて夫が爲めに宗派に事が起るに相違あるまじと云ふ事を御存じで品川東海寺の澤庵をお誘ひ遊ばして、此の澤庵を連れて此中間へ立入りましたるものと見える此方は意傳に於ては誠にどうも自分の失策を只今に致り悔悟いたして居りまするでございまするから別に自分より望んで宗論をしたくはない淨土宗一派のものゝ爲めに攻撃されるに就て事をいたす樣なものゝ天海澤庵の兩名此の扱ひに立つと云ふのは至極喜ぶ處お任せ申するの由を返答をいたし又た日慶僧都に於ても大に其の扱ひを喜ばれて之れ又た任せる事を依頼いたしました兩僧の方は相濟んだが濟まないのは三代の家光公が一旦改宗を仰せ出され前々申し上げまする通り元祖家康公始め

お他界の折りからには芝増上寺へ送りまするの筈である然るに改宗をいたし身延本山よりいたして日英大僧都を招いて此者がお目通りを仰せ付けられたる上に改宗の由を御沙汰ゐ相成りましたから日蓮宗の者はモーゲ改宗に相成つたと心得て居るゆえ此の改宗を仰せ出されましたのを此儘にして事を遂げる譯けにおらあいから、是又た天海僧正の骨折でございましたて上様へは様々に御意見を申上げました何と云つても仕方がない家康公の御他界の時に御意見百ケ條を仰せ殘され政事に就て分らん事があれば天海へ尋ねろと仰せられました位ゐの人でございます理を詰めて御意見をいたす元より名君の家光公でありますから御改宗の仰せ出されは茲に思ひ止まりましたけれども併しイツ何時万々一の事があいとも云ゐい事にありました時に之を其の日宗の方へ仰せ付けられて其の扱ひをさしても宜しくない又た芝増上寺へ對してゐ送り申し上げる儀では一時改宗を仰せ出された上のお言葉が通りません其處で萬一の時には上野へ對しゐ伴ゐい申し上げる事を乃ち老臣一同の者と申し合せまして飽くまでも芝へゐ出でゐさる事をゐ嫌ひ遊ばす夫れよりして暫くの年を重ねまして慶安四年四月二十日御他界に相成りました時に家光公御遺言に由りまして三代公ばかりは上野へゐ出でゐなりました彼の鶯谷と申し上げまする今日御靈屋の堂々として東叡山寛永寺にあります御靈屋は元祖家康公孫に三代の家光公の大猷院様の御靈屋だけで之は御遺言に依りましたるものでございます、一時宗論に於ても御沙汰止みに相成りましたのは天海僧正の働らき澤庵禪師の骨折り酒井讃岐守松平伊豆守殿何れも骨折りよ依ります處でございます茲に至りまして兩宗の者に於ても大きに

其の喜びの眉を開きました身延本山より御降りに相成りたる處の彼の日英大僧正に於きましても一旦故宗を仰せ出されにありましたものが改めて之の芝へお出でになるとでも云ふ樣では少々は申し分もありませうが掛け構ひもございません天台宗の上野へ對して万一の時にはお送り申し上げるの約束をいたしてあれば是れ又た別段に苦情を述べまする譯にも相成りませんか品川問答と申しまするは心外輕く事がいたりましたは三代の家光公は自体どうも御勇氣活達のお方でおざいますから何分にも武藝等をお好み遊ばし同じ事でもお學問の方は餘り爲さいません貴顯方に於てはモー日の中に何時から何時までは學問をする何時までは武藝をすると云ふ事が極まつて居ります、武藝をお好み遊ばすけれども學問と云ふものはトントあさいません老臣方が大きに心配をいたしました、あれとも上に於ては只だモー其の活發の君でお在て遊ばしますから柳生但馬守が眞影流の御指南をいたしまする小野派一刀流の御指南をするのが小野四郎右衛門一日替り御手を取つて御指南をするさうとうする間に上樣が追々上達をすると云ふのは俗に申する大名藝と申して上ノ方の藝當と惣じて自分免許で或日但馬守が御前へ罷り出でまして家光公正面にお扣へ遊ばす兩手を仕きまして　但「但馬竟はしき御顏を拜し恐悦申し上げ奉まつります　家「但馬其方も無事で何よりだ　但「恐れ入り奉まつります　家「今日は其方に少々尋ねる事のあるの餘の儀ではないが之に扣へる門太郎、新次郎何れも其方の門下である然るに兩人に對しては柳生眞影の皆傳をいたしたるの樣子、如何なればこそ余には傳授を其方は授けん傳授致さんとは何だ兩名へ對して免許皆傳をいたしながら余には之を許さ

んが其方の意を相尋ねる御立腹の樣でございます處が但馬守と云ふ人は遠慮のない人でありますから留らくするよ頭りを上げまして　但「之はどうも怪しからんお尋ねで兩名へ對して免許皆傳をいたした余にはおぜ皆傳をせぬと云ふのは近頃其の意を得さる事、新次郎、門太郎何れも鍛練いたして其の呼吸に當たり許すへき事がありますから依つて差し許しました恐を入つた事あがら上樣未だ未熟に入らせられますから夫れ故御免許は申上げません　家「コレ〳〵何んじや家光はまだ未熟だと申すか　但「左樣　家「フンウ、新次郎、門太郎に劣か　但「へイ御前に於いてお相手をいたす時には御遠慮申し上げて新次郎あり門太郎なり何づれも品好く對遇ひますけれども實地勝負をいたしましては中々上の及ぶ處ろではございません但馬殿と其儀は認め置きました　家「ウーム　但「御立腹の恐れ入

りますが若し夫れを御殘念に思し召すなら不意にありとも斯く申する但馬を打て御覽じろ、一本でも打れましたる其時には速座に柳生眞影の免許を憚りあがら御皆傳申上げる樣仕ります　家「何と云ふ不意に打たれても大事ない打込みさいすれば夫で直ぐに免許皆傳をすると　但「御意に御座います　家「下がれ憎くい奴た　但「ハッ」御立腹でございまして但馬守を下げて於てサー上樣が口惜がつた　家「大勢の中に於て未熟と申したな彼の老耄れ眞正では叶はあいが不意に打てない事はあるまいと思し召し明日はお仕度を遊ばしお稱の奥の處へ袋竹刀を匿したり一寸手の届きまする瓦棚の樣お處へ袋竹刀を入れて置いたりして仕度をして居る處へ但馬守に於ては御存じないから相變らず罷り出まして、御機嫌を伺ひ御口上を述べる家「進め但馬、之へ進め　但「ヘイ　家「サー其方に之を見せやうと

心得た　但「ハッ　家「どうじや此の屏風はと仰せられたので但馬は振り返つて見れば屏風一双極く密畫であります」して關ケ原の戰ひを寫しましたものでございますから申し分はありません、但馬守之を許にある品でございます　但「恐れ拜見をして驚きいつた　皆寫した之が松の山此邊が金吾中納言の備へた處でもあらうか之が台渡川、アレが石田の崎だ、成程之は恐れ入りましたトント關ケ原の戰爭を一目いたします様でと但馬守頻りに關ケ原古戰場密畫の屏風に目を止めて居ります、其の見恍れて居る隙を窺ひまして右の手をお伸べ遊ばして互棚にあります、我竹刀へ手を掛けやうとすると但馬守振り返つてヲロリと睨んだ劍術は一眼、二早速、と申しまして、一に眼でございますから眼が注くとモー打つ事が出來ない手を上へ上げたけれどもサ

ー上げた手の下ろし様に困つた、仕方がないから頭を騒き始めた　家「但馬どうも春のセイであるか上せて頭が痒い　但「恐れ入りました、どうも春先きにおりますると動ともいたしまするとお上せのございますもので　家「但馬彼れを見ろ〳〵　庭前の彼の泉水に浮んで居る鴛鴦番ひ離れぬと申する鴛鴦水遊びをして居る様子は妙だな、鴛鴦の浮んで居るのは又た別段だな　但「大分どうも居ります、鴛鴦ばかりは何程居ても雌雄連れで離れて居らぬ處は又た能く夫を心得た事にございまして」と大泉水の方へ目を治けて居る間にお辱の奥へ匿して置いた袋竹刀を取上げ様とするとヲロリッと振返つて又た目を注けられモー目付ると打つ事が出來ないからお辱へ手を下し遊ばした手のやり處に困つてしまい仕方がないから膝を擦つて　家「どうも但馬春の故が逆せて足が痒い」上せて足が痒い奴があるも

のか莞爾り笑つた但馬守　但何にかお感むれでもおさると相見にます御免を蒙むります」と云つて下つてしまつた氣が注いたから好けない、サー夫れからと云ふたのは何に分にも打たうとしても打てん、大久保彦左衛門此のことを聞いて上様の御前へ罷り出でまして　彦「伺ひます、柳生但馬を打たうと云ふ思し召しで入らつしやる　家「實に但馬は中々油斷ならうして打てないどうも彼れは何に分にも困じ果てた　彦御名代を仰せ付けられます様に名代を上様に代りまして、斯く申する彦左衛門柳生但馬守を恐れ入らせます、降參をいたさせます　家「降參をいたさせるか、夫はエライ打込むか　彦「打たうと思ひましてもなか〳〵に油斷のございませんし但馬でございますから打ち据ゑる譯ではなりません故姿を變へて御覽に入れます　家「どういたす　彦「お時服を二重ね拜領仰せ付られます樂　家「成程

して働らいたものでございます之に依て終に大坂城は落去いたす事にありました

◎第十五席

是は餘談のやうでございますが關ヶ原の合戰といふものは家康公天下を知ろし召すまでに此位お御苦心を遊ばした事はございません難波戰記に精しくおざいまする通り慶長の十九年より元和の元年にまたがり出入り二ヶ年の合戰でおざいます關ヶ原合戰をするまで永年苦心をして居りましたが戰さにありましてからは些か十一日でございます石田三成といふ人物も關の戰に敗北をあし終に泉木に首をさらされましたから人お好賊の如くに申しますが方一石田が勝利を得ました時は反つて德川家の方が三成のごとくに申されたでございませうシテ見ますると三成といふ人物も中々容易あらん男でおざいます、江州澤山に二十三万

石を賜はり秀吉公御繁昌の頃はいは五奉行の筆頭を仰せ附られたる人物にて太閤御他界の折秀吉公の御遺言と申して已に十六万の兵を集め關ヶ原に戰ひを爲すに就て第一番に味方に附あはればならんといふ人は大谷刑部義隆でございます此の大谷義隆といふ人を味方に附けあければ所詮合戰をいたすわけにありません此の義隆といふ人は前名を兵馬と申し秀吉公生涯の御家人に對して加藤福島等には各々大祿を賜はる中に同じ家人であるあがら大谷刑部ばかりは越前の御賀に於て五万石しら御遣はしにありません一説に越前の大野と申しますが全たくは越前鶴賀でおざいます此の人が後に刑部少輔にありましたが生れついて病といふ難病に罹りましたが關ヶ原戰かひの時には薄い絹の袋をかぶり出陣をして時の聲を聞て人數の掛引をいたした人でございます、三成は心鋭どき人でありますが併し太閤の思召しを

繼で合戰をするに付て是に味方をいたさなければならんといふ次第がおざいます夫は秀吉公御前に於て茶の會をいたした事がございます能く荒茶の會といつて同業者が申上ます一席の講談には加藤福島等は茶を心得んで細川幽齋の眞似をして呑んだと申上ますが其の頃の軍人は何れも茶人でございまして中々話のやうなものではおざいません中にも大谷刑部は就中にお茶を能くいたしました或る時秀吉公七名の諸侯を集めて御茶の會をいたしまして其の御招ぎになりました上席が大谷刑部義隆次席が加藤主計頭清正淺野彈正大弼、黑田甲斐守、池田武藏守輝政、細川越中守忠興、福島左衛門太夫正則、處が刑部は已れの難病を恥ぢて居りまして前申す通り絹の袋をかぶつて居ります中に鯨の心が這入つて居りますから今日で申しますとランプの笠を見たやうなものを冠つて居りますのは面部がくづれて居りまして、膿汁あと

の流れるのを見せるのも恐れあり殊に茶席でございますから當人も憚かつて右やうの姿で參りましたものと見ねます處が隣りに座つて居る清正弱つたの弱らないのと云つて實にどうも甚はだしい臭氣がいたすので大變の處へ座つたと思つて居ります其の中に万端の式も終り御濃茶のみとでございますから呑み廻しでございます先づ大谷義隆の前へ出すと義隆押し頂だき最初に菓子を認ため夫れより取り上げました御茶を呑みまするときには袋を右の手で少しく上げて然うして其の御茶を頂だく傍に見て居た清正は頻りにどういふ呑方をするかと思つて居ると大谷義隆袋を上げて呑みまするときに茶碗のなかへ鼻のとあろへたまつて居た濃汁がズル〳〵ッと逆入つた當人は目も見ねあいお　百八十

とておざいますからトッと氣が附かあい三口半飲んで清正にわたした清正は驚ろいて之れは大變だ服み廻はしたから服まん際

には行かあいが何うしたものだらう大谷氏手前の濃汁が茶碗のあかへ逆入つたといつたら定めしせきめんをするだらうし、トいつてどうも之れを頂戴する譯には行かず、イヤ〳〵ながら取り上げて見ると宜い濃汁は散らずにかたまつて居ります樣子、清正どうか宜い加減にでまかして次席へ廻さうと思ひフッと向ふ河岸へ濃汁を吹き附けて置て少しばかり呑み次席へ廻しました、淺野殿正大弱も傍だから旨い事をするぜ清正乃公の所へ來たな、乃公も一番吹て廻さうと思つて取上げた隣りに居る黒田でも池田でも物をもいはず見て居る其の中に淺野は茶碗を取て向ふ河岸へ吹寄せやうとする途端に此の人少し風邪を冒いて居た爲めに濁つて居る水ッ鼻がポタ〳〵と逆入た、黒田は之を見て、居て是れはどうも大變だ濃汁ばかりで澤山のとあろへ鼻を垂らしやアがつたといふ中に淺野は呑んだふりをして次に廻した、黒田は暫らく

目を閉ぢて居たが漸々之を取上げて一寸口を附けたまゝに輝政に渡した輝政も之を取上げ服んだふりをして次へ廻さうと思つたが併し輝政といふ人も豪傑でございましたからィヤ〳〵高の知れた濃汁だ水ッ鼻左のみ恐るゝまいと目を閉つてガブリと口へ入れて見たがまだ細川越中守と福島正則が殘つて居る是は飲み過たと思つたからドブ〳〵と吐出した細川忠興は之を見て大麁だ〳〵と思つて居ると其儘廻して寄越したから忠興取上げた儘口ヲ付けたばかりで福島に渡した正則は横紙破りといふ位の大丈夫の豪傑でムりますけれども是には弱つたモウドンあとがあつても茶席の終ひに座るものではない、是だけのものをドウやら俺が片付けなければならないかとシブ〳〵あがら取上げて暫らくの間見て居たが弓矢八幡上覽あれと……茶を飲むのに弓矢八幡などは別段に申さあくつても宜うございませうが

がブリ一口やつたが御濃茶のみとてございますからまだ澤山ある、秀吉公御覽になつて　秀「アヽ正則〳〵」　正「ヘエー」　秀「一寸夫へ差置け汗すに及ばん其茶を此れへ持て」　正「ハヽー」　秀「此れへ持て〳〵」ホッと息を吐いて其儘にして御次へ廻す太閤之を御覽にあるとまだ澤山ある　秀「義隆決して恥てはあらんが今其方が茶を飲んとおしたる時嚙汁が此茶碗の中に落ちた」此時に大谷義隆餘りのことに其所へあとずさりをして　濃「恐れ入り奉まつる」と平伏を致しまゐた時に　秀「イヤ〳〵言はざれば却つて宜しくあい申聞かせるは其方に心配をさせまいと思ふ予の志し、併し病氣として濃汁を落せしは是非に及ばん夫を其方が知る位ならば病氣ではあい知らざるが當り前だ予は其方の軍才に富みたるみとを日頃より存じ居れば予は其方にあやかるやうに茶を飲乾して遣はすと仰せられて太閤も中々ベテン師でおざいますから眞

逆御飲にもおりますまいが其茶碗を取つて口の所へ付けました
る樣子に一同恐れ入りました所が加藤の前へ差出して、秀清正
始め一同大谷にあやかるやう今一度廻し飲を致せ　清「へい！」と
驚ろいたが仕方がない一口飲んで淺野に廻す淺野も其通り黑田
も其通り池田細川も其通り口を付けて廻した福島の前へ來ると
モウ正則も今度は泣出して情あいみとを言付かつたと思つたが
トウも致し方がないから遂々ガブ〳〵飲んで仕舞つた、此福島と
云ふ人立歸つてから十日ばかり煩らつたと申しますがサウでご
ざいませう其時の御會席に御酒を下し置かれ一同立歸りました
が大谷も自分屋敷へ立歸つて此事を考へ出し涙を流し太閤殿下
が汚なき茶をお飲み遊ばして其方にあやかると云ふ有難い御言
葉を下し置かれたるを如何にも喜とはしく思ひ太閤御他界にな
つても其君のために忠を尽さんと存じて居りました其事を三成

れませんから偶には試斬りを遊ばして御覽遊ばせば御腕前も
相分りますす第一御佩刀の斬味も相分ります由を申上げた上樣
に於ても成程と思召してそこで夜毎〳〵御忍びでおざいまし
て覆面で顔を隱し御立出でに相成りましては成たけ淋しい所
丁度堀端の邊りかち半藏御門彼の近所は夜分だからと云つて
も往來がありますす、見ると其處へ、試斬りが一人ならず三人も五
人も或は八人も出て居るから、サア市中の評判は大變に高くな
りました　「危ねへせ夜は歩けねへせどうも何だせ半藏から
彼の近所は大變に居るせ昨夜あんさは三人もやられたとさ
○「然うかな　○「宜い鹽梅に手傷の薄いのは宜いが中には夫れ
限り死で仕舞つた奴がある、何と世の中が騒々しくなつたな、試
し斬りは一人か二人大低一人出て新刀を試すと云ふまとがあ
るが何だか御晩どんあつとでも五人より少ねへとはねへ　△

それぢやア歟はぬへ」と評判が高くなつたからもう夜分にあると餘り此堀端あたは往來をする者がなくなりました上樣に於ては　家「善太夫、又八郎往んあたうも今宵は三夜居るけれども頓と往來の者がない　善「餘りたうも其評が高くなりまして家「ハアー　善「此邊は往來が少なくなりました　家「成程試し斬りをする者があるから夜分は通るあとでも沙汰を致した奴があるか　善「御意にございます　家「不埒な奴だあ、宜いではないか多くの人間であるから五十人や三十人試しても……　又「御冗談仰しやつちやア往けません　家「事に依たら場所を變へやうう　善「左樣でございます此處は定店にありましたから追々何でございます何所か場所を轉じませうか　家「次第に依たら場所を轉じやう、けれども今晩で三晩何か參れは宜いな　善「左樣で何か參りますれば、宜しうございますあ　家「實い今夜持參

致したのは、是は志津三郎兼氏の劍で兼氏は斬ると云ふことであるけれどもどうも其本統の所が分らんゆに實地試さうと心得て……　善「左樣で三郎兼氏是は御銘刀でございまするあと話しをして居ると風の持て來るまに〳〵に花咲は告んと云ひし山里の鞍馬天狗の小謠ひを小聲で謠ひながら、それへ參ります、深く顏を隱し大小の光りも却つて朧月夜でございますから確と分つた故大きな松がありました、其松の蔭の所へ上樣はじめ太田、菅沼、阿部、水野なんと云ふ其何時も御供をして參ります若武士の運中何れも覆面で顏を包んで居ります　又「來たきた〳〵、參つたが恐れおのら申上げます　家「何だ　又「今晩は第一番に願ひたう存じます　家「又八か試して見い許す　又「左樣でと樣子を見て居りました、其中に彼の武士は醉て居るとと見へてヒョロ〳〵蹌けふがら行く、二足計り行過さして置て後

ろからエ、ッと一聲叫んだ儘不意に拔打ちに斬付けた、アワや其二ッあ相成つたかと思ふと、ヒラリと輕く一間計り飛れた飛だ者でございますから少し劍を引うとする其間に持て居りましたは鉄扇前と見へてスポリ手首を打れますとポロリと取落した南無三と飛で來る奴も又もや襟髮引掴んだるおとにしてドウと投げたる殿石落し忽ちの間に三間計り投付けられましたを見るより二番目に斬て掛るをかッチリ受流したのは鉄扇に相違ない体を開ひて手許へ這入るかと思ひまゝと其儘にしてそれへ打据られたゆえ善太夫打倒れる其間に右左りから斬掛けて來る奴の劍の下を掻潛りまして、かチ〳〵と受留めた兩人を對手に二、三合打合で居りましたが、一人は屋の通りを傳かに打れ一人は面部を打れて倒れる樣子、今度は三人一度に掛ますす所が三人が四人でも少しも弱る樣子もない右に當り左

りに當りまして打合で居たが何れもスポッ〳〵と鐵扇で打倒された上樣が樣子を見て御在で遊ばしたが悪い奴があれば あるもの、嬶鳴懐中に入る時は獵師も之を討ず、斬捨て何の役にも立たんが手向ひを致すに於ては彼奴を斬て呉れやうと思召して上後に於ては志津三郎の一刀を引拔く儀に斬付ける所がッチリ受流し手許へ這入つたかと思ふと何かは堪りません、上樣の持て御在で遊ばした一刀を打落された、扨はと差添へ御手が掛る所を是亦其手首の所を健かに打れましたから差添を拔くことが出來ない其中に飛込で參りましたのは、雷光の如き早業でございまして、トウ〳〵腰の邊りを一つ打れると打倒れた起上らうと致する其身体へウムと乘掛ると、丸で磐石に拉がれましたるやうあるもので起上らうとしたが上樣動けばこそ侍何だ貴樣は世の中にはどうも不埒な奴があればあるもの察す

る所若武士の新刀試しか腕試しの人を斬ると云ふことはなか〳〵六ヶ敷宜いか試し斬りにでも出ると云ふなら色々人を斬ることを能く辨別へてそれから出ろ、未熟な腕前を以て一人あらず五人八人も出ると云ふは丸でどうも試し斬りの寄合ひだ以來斯樣なことを致さんと申すから命は助けて遣はす強て試し斬りをしなければあらんと言へば是非に及ばん其の所に於て汝の一命を絶つから左樣心得ろ　家「コレ心得違ひを致すな

不届き者め　侍「不届き者だと……試し斬りをしやうとする方が不届きではないか、イヤサ何が不届き者だ　家「無禮を致すと其分には捨置かんぞ吾れを何と心得る、予は三代の將軍家光であるぞ　侍「默れ〳〵怪しからんことを云ふ奴だ三代の將軍家光とは何事恐れ多くも將軍家の尊名を稱へると、は何だ上樣は唯今頃は御本丸にお在で遊ばして、モウ眠りに就て今時分は夢の三度も見て御在で遊ばす時分、己れの命を助からうと思ふ所から苦し紛れとは言ひながら、家光であるから許せとは何だ、サア何者であるか此中の其方は巨魁と思ふ尋常に申せ、コレ〳〵其方共起て參り再たび手向ひを致せばモウ此度は鉄扇ではいや本物だぞ、一人も助けないから左樣心得ろ」と押へて居ながら忽ちの間に身搦へをして居るから、一旦起上りました者も亦「オヤ〳〵往けない大變なものが來た迂濶したことは出來ないあ仕方がないから倒れて居やうと上樣を御助申上ることが出來ないから各々それへ倒れた限り起ずに居た　家「ア、〳〵家光に相違ないから放せ　侍「未盲か家光あ相違ないから放せとは何だ聰明英智武勇活達ある所の將軍家が唯今頃い試斬の群へ追入り右樣な不埒を働く譯はない未だ申すに於ては我此場に汝の素首を引抜て仕舞　家「ヤア誰か參れ予の一大事で有